

---

Hyper fresh

でりでり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

H y p e r   f r e s h

### 【Nコード】

N 9 1 0 6 L

### 【作者名】

でりでり

### 【あらすじ】

ポケモンカードゲームシリーズで翔達がPCCを戦い切る約一か月前、大阪では別のストーリーがあった。

ポケモンカードゲームシリーズの番外編ですが、この話だけでも楽しめるようにしてありますので安心して読んでください。

また、実在する団体名などが出ますが勿論のこと小説で起こったことは全く関係ありません。

本編「ポケモンカードゲームシリーズ」は

<http://ncode.syosetu.com/n78831/>

挿絵等を募集中です。興味がある場合は連絡ください。

私と霜月さんのサイト、「気長きまな旅紀行」

<http://www.geocities.jp/derideri1215/>

でりでのブログ、「Super daily fly」

<http://morarareru.blog81.fc2.com/>

キャラクターをまとめてみました。気長wiki

<http://www15.atwiki.jp/kinaga/>

デッキソースまとめ

<http://www.geocities.jp/derideri1215/library/card/deck.html>

カード検索はこちらから（公式サイトです）

<http://www.pokemon-card.com/card/>

## 1話 発端

この駅は今日もうざったくなる程人が集まっている。

ここを通学に使う身としては、ここを訪れる修学旅行生や外人、旅行に来たおっさんおばはんが邪魔で仕方ない。

特に外人なんて最悪で、タチが悪いと道を聞いてくる。

こちらら英語の成績ひどいんだ。これ以上ない迷惑である。道くらい調べてから来なさい。

などと一人で悪態をつきながら歩いていると、唐突に肩を叩かれた。

「おはよ」

幼なじみの宇田由香里うた ゆかりであった。

「おはよ」

こいつとは家が近所な上に親同士が仲良しかったせい、幼稚園以前からの知り合いで、小学校も中学校も一緒だった。

と言えど中学校に入る春のときに由香里の父が東京に赴任することになり、一緒に東京に行って一時離れることになってしまった。

二年後の中学三年の春には戻って来て再び同じ中学で学ぶことになったのだが。

そしてたまたま同じ高校に入り、今のように同じ通学路に行くことに。

決して悪い奴ではないんだが、ちょっと絡みがめんどくさいところがあるのがたまに傷。

「昨日寝不足でめっちゃ眠いわ……」

「何してたん？」

「ネット」

「相変わらずやなあ。ほらもうあくび移ったやん」

一つ大きなあくびをすれば、由香里も続いて大あくび。は、いいんだが叩くな、痛い痛い。

朝の駅は今日も変わらず人で雑多していて、改札口は人と人がぶつかりそうになる。

駅を抜けて学校までの長い長い徒歩の時間を学校の話やら他愛のない話で潰していると、由香里がこんな話を切り出した。

「そっぴや来週のバトルチャレ行く？」

バトルチャレとはバトルチャレンジの略で、ポケモンの公式イベントのことだ。

ゲームとカードの対戦が行えるイベントで、特にゲームのようにWi-Fiなどなく対戦機会が少ないカードにとっては絶好のイベントである。

丁度学校の側のショッピングモールで行われるので、交通費も定額があるし行こうかと誘われたのだ。行かない手はないだろう。

「中学生以上は午前はカード部門のみで午後はゲーム部門のみやってさ。両方出るやろ？」

「当たり前やろ」

と、言っただけがいいが気になる点が少しばかりある。

「日付は？」

「安心しーや。別になんかと被ったりはしーひんから」

「せやったらええねんけど」

その後は話題が再び学校の話に戻り、長い道のりを歩いてようやく学校に辿り着く。

階段を登り我ら一年生の教室のある二階に着くと、由香里と離れた。高校までも同じ俺たちだが、俺と由香里は隣のクラス同士である。

デッキをどうしよう。

今日はほとんどそんなことを考えていた。なんせここしばらくまともにデッキを組んでいなかったものでどう構築していいかが手探

り状態だ。半日考えていたらもう下校時刻になっていた。時の流れが早すぎる。

「どないしたん？ そんな鳩がロケットランチャーを喰らったような顔して」

「鳩死んでるぞそれ」

学校から駅までの長い道を、一人デツキを考えながらのんびり帰っていると同じように由香里が声をかけてきた。

「うん、せやから啓史の顔が死んでるような顔」

「ケーシイ言っな」

啓史と言っのは俺の下の名前で、名字は森。この下の名前を伸ばすとケーシイに聞こえるからそう呼ばれたりすることがあるのだが、呼ばれる度になんだかバカにされたように言われるのでただの蔑称でしかない。個人的には嫌いな呼び名だ。

「言ってへんわ！ ちよつと自意識がずっ、過剰ちゃう？」

「なんやねん、詰まるところちゃうやろ」

「うっ、うっさいなあ」

からかうように笑ってやると、由香里が顔を赤らめて、すぐにプイツと前を向く。横髪のせいで由香里の顔が見えなくなる。

ちよつと怒らせてしまったのか、会話は絶えて周囲の雑踏しか聴こえなくなる。

こっぴどい沈黙は大の苦手。こっぴどい責任をもってこちらから話しかける。

「噛むといえさあ」

「せや、バトチャレのことやねんけど」

「俺の話……」

「他に誰か誘った？」

「え？ ああ、誘ったよ」

そう聞くと由香里は右手を軽くデコに当てた。この動作に果たして何の意味があるのか。

「で、誰誘ったん」

「タカ」

「ホンマに杉浦好きやなあ」  
すきつら たかひと

タカというのは杉浦孝仁という俺の親友の名前である。高校は別々だが、由香里同様付き合いが長い。

彼は俺や由香里のようにカードはやらないが、ゲームが非常に強くてそこそこの名が知れている。

ちなみに私見だが非常にイケメンである。

呼び方で分かるかもしれないが、俺とタカはかなり仲がいいが、由香里とタカはそんなに仲がいいわけではない。せいぜい友達つてとこだ。

「杉浦は朝から来んの？」

「うん。来るって言ってた」

「朝はカード部門だけやのになんで来るん？」

「聞いたところだと理由は一人で行くのが嫌っていうのと、（）野良試合したいからやってさ」

野良試合・ポケモンのワイヤレス通信を利用し、適当な人と対戦をすること。

「なるほどな、納得したわ」

「まあタカ自体は場所わからんし賢明な判断やろ」

ようやく着いた駅のホームでは今にも新快速が出ようとしていたところだった。

鞆を閉まろうとしていた扉に挟み、無理やり扉を開かせる荒業を使つて乗った電車はいつもより乗客が多かった。

夏は終わったがまだ九月。熱気が溢れる車内では、一日の疲れが直接に体に来てデッキを考えるまでに思考能力は届かなかった。

## 2話 バトルチャレンジ京都

イベント当日。学校に行く日と同じ時刻に起きた。

学校のそばが会場なので、この時刻に起きるのは当然と言えば当然だ。

とはいえ日曜日なのにこんな早くから起きるのは氣にくわないのだが、二度寝をしてしまわないうちに芋虫のようにベッドから這い出る。

地元のＪＲの駅の改札で待ち合わせをしていた。駅の側のコンビニでお茶のペットボトルを買い、一人先に待つ。

待ち合わせの時間は七時十分。もう八分なのに二人が来る気配が一切感じられない。

いわゆる時間にルーズというものが信じられないタチなのでだいたい十分前に集合場所に来るのがモットーなのだがいかんせん他の二人は遅すぎる。

携帯をいじいじしているとようやく由香里がやって来た。十七分になつてからだった。

黄文字で雑多に書かれた英語をプリントしたピンクの長袖のシャツと、白のプリーツスカートで現れた由香里は着くや否や肩で息をする。

「間に合った？」

「全然間に合つてへんわ」

これだけ待たして何を抜かす。仕方ないのでペットボトルを渡してやると、ありがとうと一言言ってからガブガブ飲み始める。一口のつもりがこの野郎。

さて、問題はあと一人だが――。

「ちょっとタカに電話してくる」

由香里も遅刻癖があるが、特別タカは時間にルーズ過ぎる。

ルーズというかただ単に朝が弱いというか、七割近く寝坊してるだろう。

しつこく電話をかけて四回目ようやく繋がった。

今もう出るとこだ、とタカは言っていたが今もう起きたとこだの間違いだ。声が寝惚けている。しつかりしなさい。そんなことを言っても何もならないので通話を切る。

あと二十分待ちか……。このとき既に時刻は七時二十分を越えようとしていた。

京都駅に着いたのは九時になってからだった。

由香里とタカの遅刻者二名に加え、人身事故で電車が遅れたため更に予定が狂っていく。集合時間を早めに設定していて本当に良かった。

「いつも八条西口から学校に向かって行ってるけど、今日は反対側こっちからやねんな」

「会場にはバスで行かなあかんからな。アホみたいにバス停多いこっちから行かな」

梅田のバス地獄で経験済みだが、バスが大量にある場所ではどのバスがどこにつながるか確認しなければならない。特に三人ともあまりバスを使わないタイプなのでこの作業は困難だった。

バスの路線図がびっしり書かれている大きなボードの前に立ち、目的のバスはどれかと探していると、背後の人とぶつかった。

「あつ、すいません」

そう言つて、左に体を動かした。

ぶつかった男も申し訳ないように軽く会釈する。

少し太った体型と、大きな黒縁眼鏡。なのに坊主頭な地藏を思わせるその男と目があつたが、意外と愛嬌のある顔だった。

後から「はよせー！」と、由香里の怒号が飛びかかり、我に帰る。いやいやお前も手伝え。

ようやく目的のバスを見つけると、今にも発車しそうなそれに俺達三人は駆け込んだ。

ようやく着いた。

会場のあるショッピングモールは、中に入ればここが会場だよという甘いものではない。むしろ会場を探すのはここからだ。

アホみたいに広いショッピングモールの一角にある会場を自分達で探さなければいけない。地図はあれどもそこまでが遠い。

割り與人見知りな俺とタカは、由香里に職員に会場がどこか尋ねる仕事を押し付けてようやく会場にたどり着く。

バトルチャレンジ会場。既に熱い対戦があちこちで始まっていた。ちびっこ共がゲームで、その隣のスペースでは大きいお友だちがカードで戦いを繰り広げている。

ちなみにグッズ売り場もあり、カードや各種グッズが売ってある。

「んじゃ行ってくるわ」

「おう」

俺と由香里は目的の違うタカとは別れ、カードコーナーへ。

用紙（正式名はバトルシート？）を受け取り、列に並ぶ。

カードをする机には数が限られているので、溢れた人らは机が開くまで、係員の指示に従つて並ぶのが一般的。今回もそうだ。だいたいこの時間がすごく退屈。

列から目を凝らせば、少しばかり対戦の様子が伺える。

デッキシールドが東方、しかもその相手は恋姫無双、いわゆるキヤラスリーブかよ。分かる自分もアレやけど、回りのテーブルを見たら他にもいろいろあるのにポケモンスリーブが少なすぎる。

ちなみに俺のデッキシールドはアルセウスが書かれた暗い青色のものである。逆に浮きそう。

「ボサツとすんな」

急に体を引つ張られる。

列が進んだから、お前も前に来い、と前にいる由香里に引つ張られた。申し訳ない。

ところで今の列は、俺の前には由香里とおっさん（に見えるだけで実際は若いかも）が一人いるだけなので、テーブルが二つ開けば出番だ。いつでも戦えるようにデッキケースからデッキを出しておく。

そんなことをしていると、由香里とその前の人が机につき、そして俺の番が回って来て俺も席につく。

子供の付き添いで来ました風のパパさんプレイヤーが相手だったため、大人気なくスタン（スタンダードデッキの略）にも関わらず速攻を決めて倒してしまった。

まずは一勝。このイベントでは勝てば勝つほどプロモカードがもらえる。

プロモカードはごく一部を覗いて扱い辛いカードだが、コレクター的には希少価値はある。

スタッフからカードをもらって机に構える。

そして続けてやってきた人にも圧勝し、勝利のメダル（プロモカードの名前）をもらって最後の挑戦者を待つ。

そうして俺の前に座ったのは、京都駅のバス停で会った地蔵のような人だった。

「よろしく願います」

デッキを互いにシャッフルして手札のポケモンを伏せ、最後にサイドを並べる。

最初のポケモンは俺がゴウカザル四90/90。相手はペラップ  
60/60でベンチにラルトス60/60。

先攻を決めるじゃんけんで負けた俺は後攻からのスタートだ。

啓史「今日のキーカードはゴウカザル四。

四ってというのは四天王の四って意味な。

レベルアップしてからがこいつの本領発揮やで」

ゴウカザル四「してんのう」Lv.55 HP90 炎 (DPt)

炎無 ばくれつたん

相手のポケモン2匹に、それぞれ20ダメージ。

炎無無 とびひざげり 50

弱点 水×2 抵抗力 | にげる 1

### 3話 三戦目

バトルチャレンジにて俺と地蔵っぼいの（バトルシートを確認したところ、名前は喜田敏光というらしい）の勝負が始まる。

最初のポケモンは俺がゴウカザル四90/90。相手はペラップ60/60でベンチにラルトス60/60。そしてサイドは互いに三枚。

俺の手札は少なくともいいとは言えないが、いつでも挽回の効く範囲だ。

さすがにペラップじゃあ1キルは起きないだろうし、それに警戒する必要もないだろう。

「俺のターン。ペラップに闘エネルギーをつけて、ワザ、仲間を呼ぶを発動。その効果でデッキからラルトス（60/60）をベンチに出す」

ラルトスのような超ポケモンがいるにも関わらず闘エネルギーがあるということはエルレイドがいるってことか……。

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードはゴウカザル四LV.X。だが、互いに最初のターンはレベルアップは出来ない。

「サポーターカード発動。アカギの策略！ 自分のデッキからサポーターと基本エネルギーと名前に『ギンガ団の発明』とつくトレナーをそれぞれ一枚ずつ選んで相手に見せてから手札に加える」

自分のデッキを一枚ずつ確認していき、目当てのカードを探す。

「俺が選ぶのはアカギの策略と炎エネルギーと、ギンガ団の発明G-101 エナジーゲインや！」

サーチしたカードを喜田に見せつける。喜田は了承したと首を縦に振る。

「手札のガブリアスC（80/80）をベンチに出す。そしてゴウカザル四に炎エネルギーをつけて、ポケモンの道具のエナジーゲイ

ンをゴウカザル四につける」

エナジーゲインはSPポケモン専用の道具で、これがついたポケモンは必要なワザエネルギーが無色エネルギー一つ分減る。実質エネルギーカードをつけているようなもので、ワザエネルギーが多いSPポケモンには必須のカードだ。

ちなみにSPポケモンとは昔のジムリーダーのなににみたいたポケモンであり、全てたねポケモンとして扱われる。SPポケモンはポケモンの名前の後に四だのGしだのCだのGだのついているのが特徴。

「ゴウカザル四で攻撃。爆裂弾！ このワザは相手のポケモン二匹に20ダメージを与える。俺が選ぶのはベンチのラルトス二匹や！」ベンチのラルトス二匹のHPが40/60に。目の前のペラップを殴らない理由は、展開ポケモンとしてはペラップは弱い部類で害が少なく、俺のキーカードで瞬殺出来ると踏んだからだ。

「俺の番だ！」

喜田が勢いよくドロース。喜田が座っているパイプ椅子が少しボロいせいで、ギイイと耳を突くような音が聞こえる。

「闘エネルギーをラルトスにつけ、サポーター発動。ミズキの検索」ミズキの検索は自分の手札を一枚デッキに戻し、デッキから好きなポケモンを手札に加える効果をもつ。

「俺はエルレイドを手札に加える！」

やはりエルレイドがデッキに入っていたか。

「グッズの不思議なアメを使つて、闘エネルギーのついたラルトスをエルレイドに進化させる」

不思議なアメは自分の進化していないポケモンを、1進化及び2進化ポケモンに進化させるカード。

その効果によって、ポケモンを出した番にも進化できるし、通常はラルトス、キルリア、エルレイドと順番を経ていかないといけない進化も今のようにラルトスからエルレイド110/130へ、いわゆる飛び進化ができる。

「そしてペラップで仲間を呼ぶ。デッキからまた新たなラルトス（60/60）をベンチに出す」

これで相手のベンチはエルレイドとラルトス二匹が並ぶことになる。

「俺のターン！」

引いたカードはアグノム70/70。

「手札のアグノムをベンチに出す。そしてこの瞬間にアグノムのポケパワー発動や！ タイムウォーク！ タイムウォークの効果によって俺はサイドを確認し、その中のポケモンのカードを相手に見せてから手札に加えてよい。俺はレントラーGLを手札に加える。そして手札一枚をウラにしてサイドに戻す！」

戻したカードは雷エネルギー。エネルギーに関しては困っていないので、このカードを戻すのは当然とも言える。

「レントラーGL（80/80）をベンチに出し、更にゴウカザル四をレベルアップさせる！」

ゴウカザル四LV・X110/110が現れたことで場は整った、ペースはこちら側に確実に傾いている。押すなら今だ！

「ゴウカザル四LV・Xのポケパワーを発動。威嚇の雄叫び！ 相手のバトルポケモンとベンチポケモンを入れ換える。入れ換えるポケモンは相手が選ぶ」

「ならペラップとダメージのないラルトスを入れ換える」

やはりそう来たか。このままだと攻撃してもHPが10届かない！

「手札のアカギの策略を発動！ その効果によってアカギの策略と炎エネルギー、そしてギンガ団の発明G-105 ポケターンを手札に加える」

再び消費した手札をリカバリーする。これによって手札は六枚。

「炎エネルギーをゴウカザル四LV・Xにつけて攻撃」

レベルアップした今ゴウカザルが使える技は三種類。そのうち一つが先のターンに使った爆裂弾。そして飛び膝蹴りと炎の渦。

飛び膝蹴りは相手に50ダメージを与えるワザだが、それではH

P60/60のラルトスを倒せない。だったら、リスクはあるが……。

「炎の渦！ このワザのリスクとしてゴウカザルについているエネルギーを二つトラッシュする。せやけど100ダメージや！」

ゴウカザルの炎エネルギーを二枚トラッシュに置くが、相手も気絶したラルトス0/60をトラッシュする。これでサイドを一枚引く。

先手は打てた！ 流れは掴めたはずだ。喜田はエルレイド110/130をバトル場に繰り出した。

「俺の番。ドローだ！」

喜田の手札は僅か二枚。手札も試合運びも俺が押している。

「手札からエネルギー付け替えを使う」

「エネルギー付け替え！？」

「その効果によってペラップについている闘エネルギーをエルレイドに付け替える」

喜田はベンチのペラップについていた闘エネルギーをエルレイドにつけなおす。これでエルレイドには闘エネルギーが二つについていることになる。

「手札からサポーター発動、デンジの哲学。デンジの哲学は自分の手札が六枚になるようドローするカード。そして今の俺の手札は0。よって六枚ドロー！」

大幅に手札補強を図ったか。どう攻めてくるんだ。

「ベンチのラルトスをキルリア（60/80）に進化させ、エルレイドに超エネルギーをつける。更にエルレイドにポケモンの道具、達人の帯もつけさせてもらう」

達人の帯はつけたポケモンのHPを20上げるだけでなくワザで与えるダメージも20増える。が、達人の帯をつけたポケモンが気絶した場合に相手をとるサイドは一枚となるカード。メリットとデメリットが混ざった強力カードだ。

エルレイドのHPが20上昇し、130/150。もう倒すの難

しくなる。

「エルレイドでゴウカザル四LV・Xを攻撃。サイコカッター！このとき、ウラになっている自分のサイドを好きなだけ選び、オモテにしてよい。その場合、オモテにした枚数かける20ダメージを追加する！俺はサイドを二枚オモテにする！」

「なっ！」

サイコカッターの元の威力は60。それが達人の帯で20、サイドを二枚オモテにしたことによって40ダメージ追加されてゴウカザル四LV・Xが受けるダメージは120。ゴウカザルのHP110/110を上回るダメージだ。一撃でゴウカザル四LV・Xが気絶だなんて。

「俺もサイドを引かしてもらっ」

相手の場には強力なエルレイドが残っているのが極めて厄介だ。しかしこいつを倒さなければ勝つことは出来ない。

俺の二番手はレントラーGL80/80。しかしこのままではエルレイドを突破できそうにない。どうしたものか。

「俺のターン！」

引いたカードは四枚目のアカギの策略。トラッシュに既に二枚あり、先のターンにあらかじめ一枚を手札に加えていたので、これを手札に二枚アカギの策略が入ったことになる。

「アカギの策略を発動。その効果で雷エネルギー、クロツグの貢献、ギンガ団の発明G-109 Sプレーダーを手札に加え、俺は手札からSプレーダーを発動だ！」

Sプレーダーは手札を一枚デッキに戻すことで、SPポケモンをデッキから一枚手札に加えられる強力なサーチカードだ。

「俺はレントラーGL LV・Xを手札に加える。そしてレントラーに雷エネルギー、エナジーゲインをつけ、レントラーをレベルアップ！そしてこの瞬間にレントラーGL LV・X（110/110）のポケパワーを発動させる！輝く眼差し！」

「なにっ！？」

「このポケパワーによって、相手のポケモンを入れ換える。エルレイドとキルリアを入れ換えてもらうで！」

喜田がベンチのカードの入れ換えを行う。目の前のエルレイドが倒せないのなら相手のベンチを潰すまでだ。

「レントラーで攻撃。フラッシュインパクト！ 相手に60ダメージ！ だがこのワザの効果によって、自分のポケモン一匹も30ダメージ受ける」

フラッシュインパクトの威力は60。目の前のHPが残り60のキルリアは撃破できたが、ワザの効果でベンチのアグノムにも30ダメージだ。これでアグノムの残りHPは40/70。

喜田は気絶したキルリアをトラッシュし、再びエルレイドをバトル場に出す。

「俺はサイドを一枚引いてターンエンドだ」

取って取られての繰り返し、気の抜けない戦いが続く。

啓史「今回のキーカードはエルレイド！」

サイコカッターでダメージを調整。

相手を一撃で押しきれ！」

エルレイドLv.55 HP130 闘 (DP3)

闘無 ソニックブレード

相手の残りHPが「50」になるように、相手にダメージカウンターをのせる。のせた場合、相手を相手のベンチポケモンと入れ替える。入れ替えるベンチポケモンは相手プレイヤーが選ぶ。

超無無 サイコカッター 60+

のぞむなら、ウラになっている自分のサイドを好きなだけ選び、オモテにしてよい。その場合、オモテにした枚数×20ダメージを追加。(オモテにしたサイドは、そのカードをとるまでオモテのまま)

ま。  
）  
弱点 超  
+ 3  
0 抵抗力  
|  
にげる  
2

#### 4話 サイコカッターを打ち破れ！

「行くぞ、ドロー！」

喜田のターンが再び始まる。

俺のサイドは残り四枚、手札は五枚。バトル場には雷エネルギーとエナジーゲインのついたレントラーGL LV・X110/110、ベンチにはガブリアスC80/80と、アグノム40/70。

一方の喜田はサイド五枚の手札六枚で、バトル場には超エネルギーが一枚、闘エネルギーが二枚、さらに達人の帯がついているエルレイド130/150。ベンチにはペラップ60/60だけだ。サイドでは俺は有利だが、サイコカッターで高火力を弾き出すエルレイドが厄介極まりない。

「手札のラルトスをベンチに出し、超エネルギーをつける。そしてサポーターのオーキド博士の訪問を発動。デッキからカードを三枚ドローし、手札のカード一枚をデッキの底に戻す」

四匹目のラルトス60/60が場に現れる。同名のカードは四枚しか入れられないからこれが喜田の最後のラルトスなのは間違いない。「更に手札からグズカード、夜のメンテナンスを発動。トラッシュのポケモンと基本エネルギーを三枚まで選び、デッキに戻してシヤッフル。俺が戻すのはラルトス二枚とキルリアだ」

「ラルトスがデッキに戻った！？」

「エルレイドでレントラーGL LV・Xを攻撃。サイコカッター！ レントラーGL LV・Xの弱点は闘タイプ！ 元々の威力80の二倍、160ダメージだ！」

レントラーのHPは110/110は一撃でやられてしまう。普通は一撃でやられるようなHPちゃうつて……！

「サイドを一枚引いてターンエンド」

「俺は新しくアグノムをベンチに出す。そして俺の番や！」

アグノムは壁役だ。あのエルレイドを倒すには犠牲になるポケモ

ンが要る。壁になつてもらう間になんとか後続のポケモンを育てなくては。

「サポーター、アカギの策略を発動。その効果でデッキからハマナのリサーチ、炎エネルギー、エナジーゲインを手札に加え、炎エネルギーとエナジーゲインをガブリアスCにつける」

今はぐつと耐えるときだ。準備をミスれば勝機はなくなる。

「ベンチにゴウカザル四90/90を出し、スタジアムカード、ギンガ団のアジトを発動。このカードがある限り、互いのポケモンが手札から進化したときそのポケモンにダメージカウンターを二つ乗せる！」

ギンガ団のアジトでこの後に立つ喜田のポケモンをある程度妨害出来る。HP満タンのエルレイド二匹目だけは避けたいしな。

「ターンエンドや」

準備は整った。さあかかつて来い！

「今度は俺のターン！ サポーターカードのミズキの検索を発動。手札を一枚戻してデッキからキルリアを手札に加え、その後デッキをシャッフル。ベンチのラルトスをキルリア（80/80）に進化させる！」

「スタジアムのギンガ団のアジトの効果によって、進化したキルリアは20ダメージだ」

これでキルリアのHP60/80。

「キルリアに闘エネルギーをつけ、エルレイドでアグノムに攻撃！サイコカッター！」

放たれたサイコカッターの威力は元の威力に加え、達人の帯の効果で20加算され80。残りHPが僅か40のアグノムはもちろん耐えれず気絶してしまう。

今、喜田がサイドを引いたことによつて、これで相手のサイドは三枚になった。

エルレイドのサイコカッターの効果は攻撃時、自分の伏せてあるサイドを任意の数だけめくり、その枚数×20ダメージを追加出来

るものだ。今の喜田のサイドは全てウラだ。つまりサイコカッターでめくれるサイド、加算出来るダメージは最大60。

エルレイドが最も苦手とする『終盤』へ勝負は差し掛かった。

「俺の次のポケモンはガブリアスCや」

今の手札はリヨウの検索、ハマナのリサーチ、ポケターン、SPリーダー。

次のドローがなんであれ、逆転へ繋がるターンとしなければ。

「俺のターン！ 手札のサポーター、リヨウの採集を発動。その効果によってトラッシュのゴウカザル4LV・X、炎エネルギーを手札に戻す」

リヨウの採集は、トラッシュのSPポケモン、基本エネルギーを合計二枚まで手札に戻すサルベージ能力を持つサポーターだ。

「更に手札からSPリーダーを発動。その効果でデッキからガブリアスC LV・Xを手札に加え、バトル場のガブリアスCをレベルアップ！ ガブリアスC LV・X（110/110）に炎エネルギーをつけ、エルレイドに攻撃だ。ドラゴンダイブ！」

ドラゴンダイブの威力は80。このワザを受けたエルレイド50/150のHPはもう少しのところまで削れた。ただ、ドラゴンダイブはエネルギーを二枚トラッシュしなければならないデメリットがある。

「俺はドラゴンダイブの効果でガブリアスの炎エネルギーを二枚トラッシュしてターンエンドだ」

ここまでは考えていた通りの流れだ。だが、目の前のエルレイドを倒すための計算が相手の番で狂うかもしれない。大丈夫のはず。とはいえ不安が突っかかる。

「俺のターン！」

喜田の表情は変わらない。

「手札のラルトス（60/60）をベンチに出し、超エネルギーをつける」

また新しいラルトス。そんなに出してなんのつもりだ。

「サポーター、ミズキの検索を使う。手札を一枚戻してデッキのエルレイドを手札に加えさせてもらう。そしてベンチのキルリアをエルレイドに進化させる！」

二匹目のエルレイドがベンチに現れる。一匹倒すのに精一杯なのに、易々と出しやがって！

「だがスタジアムの効果で、進化したエルレイドに20ダメージだ」  
二匹目のエルレイドのHPを90/130まで削る。俺のささやかな抵抗に、喜田は苦い顔でダメカンをベンチのエルレイドに乗せた。

「エルレイドでガブリアスC LV・Xを攻撃。サイコカッター！  
サイドを二枚めくことで計120ダメージだ」

受けるダメージは60+20+40=120ダメージ。強烈な一撃にガブリアスC LV・X0/110は為す術もなく気絶になる。  
「サイドを一枚引いてターンエンド」

喜田はサイコカッターによって表側になった不思議なアメを手札に加えていた。

次のターンにベンチのラルトスを進化させるのかもしれない。

喜田のサイドは一枚表側（超エネルギー）、もう一枚が裏側。もう俺のLV・Xポケモンが一撃で倒されることはないはずだ

「行くで、俺のターンや！」

引いたカードは四枚目のエナジーゲイン。これで俺の手札はエナジーゲイン、炎エネルギー、ハマナのリサーチ、ポケターン、ゴウカザル四LV・X。

「荒い手やけど、そのエルレイドを今から倒すぜ！」

俺の宣言に喜田は怪訝そうな顔をする。

誰だつてそうだろう。俺の場にはもうゴウカザル四しか残っていない上に、このまま次のターンになれば喜田のエルレイドにゴウカザル四は一撃で倒されてしまうのだ。だけど手札にはそれを打破出来るカードは揃っている。

「行くぜ、俺は炎エネルギーとエナジーゲインをゴウカザル四につ

けて、ゴウカザル四LV・X（110/110）にレベルアップさせる！ それだけじゃない。手札のハマナのリサーチを使って俺はデッキのクロバットGを二枚手札に加える」

「クロバットGを二枚だって!？」

ただ、デッキからカードを大量に加えたことによって俺のデッキの残量も刻々と少なくなっていく。もう三十枚は確実にない、な。

「クロバットG（80/80）二匹をベンチに出し、この瞬間にクロバットのポケパワーを使うぜ。クロバットのポケパワーはベンチに出した時に使え、相手のポケモン一匹にダメージカウンターを一つつける。二匹同時にポケパワーを使うことによってエルレイドに二つダメージカウンターを乗せるぜ。フラッシュバイツ!」

「でもこれだけではエルレイドは……」

エルレイドの残りHPは30。ゴウカザル四LV・Xのワザでエルレイドを倒すには後、10ダメージ足りない。

「だからこのカードや。グズスカード、ポケターン発動!」

喜田の表情によろやく驚きが現れる。

「ポケターンの効果によって、ベンチのSPポケモンを手札に戻す。戻すカードはもちろんクロバットG」

わざとらしくクロバットGを喜田に見せてから手札に戻す。まあ戻すと言っても今の手札はこのクロバットのみだが。

「そしてもう一度クロバットGをベンチに出してエルレイドにフラッシュバイツ。これで射程圏内や! ゴウカザル四LV・Xで攻撃。爆裂弾! このワザは相手のポケモン二匹に20ダメージを与える。そのエルレイドとベンチのラルトスに20ダメージずつプレゼントや!」

よろやく苦戦し続けたエルレイドを気絶させることが出来た。今倒したエルレイドは達人の帯がついている。達人の帯がついたポケモンが気絶した場合、相手は二枚サイドを引くことが出来る。よって俺はサイドを二枚引く。

これで俺と喜田の残りサイドは共に二枚。ようやくこれで追いついた。

「暴れた利子はしっかりもろたで！」

啓史「今日のキーカードはゴウカザル四LV・X！」

ポケパワーで相手のベンチからポケモンを引きずり出し、

炎の渦で薙ぎ倒せ！」

ゴウカザル四LV・X HP110 炎 (DP t2 - S)

ポケパワー いかくのおたけび

自分の番に1回使える。相手のバトルポケモンを、相手のベンチポケモンと入れ替える。入れ替えるベンチポケモンは相手プレイヤーが選ぶ。このパワーは、このポケモンが特殊状態なら使えない。

炎炎無 ほのおのうず 100

自分のエネルギーを2個トラッシュ。

—このカードは、バトル場のゴウカザル四に重ねてレベルアップさせる。レベルアップ前のワザ・ポケパワーも使うことができ、ポケボディーもはたらく。—

弱点 水×2 抵抗力 — にげる 0

## 5話 光景

ようやく苦戦させられたエルレイドを撃破したものの、喜田の次のポケモンはまたもやエルレイドだが、そのHPは90/130。ギンガ団のアジトなどでじわじわ削った甲斐があった。

今の俺と相手のサイドは共に二枚。喜田のベンチにはラルトス40/60とペラップ60/60。

そして俺のバトル場にゴウカザル四LV・X110/110とベンチにクロバットG80/80が二匹。

「俺のターン。手札の闘エネルギーをエルレイドにつける」

喜田はエルレイドに三つ目のエネルギーをつける。これで再びサイコカッターの使用条件が満たされる。

「手札の不思議なアメを発動！ 自分のたねポケモンから進化するポケモンを手札から一枚選び、進化させる。ベンチのラルトスをサイナイトに進化させる！」

「手札からの進化やからギンガ団のアジトの効果受けてもらうで」先のターンのダメージと加算して、サイナイトのHPはすでに70/110。俺のデッキの火力やと一撃圏内であるのは確かだ。

「まずはエルレイドでゴウカザル四LV・Xを倒す！ サイコカッター！」

「それはええけど倒しきれんの？」

「っ……………」

「裏側のサイド一枚しかない上に、達人の帯もない状況。どうあがいても80ダメージが関の山や。これやとゴウカザル四LV・Xは倒しきれへん」

「……………分かつている！ くっ、サイドを一枚めくってサイコカッター！」

最後の喜田のサイドがめくられ、ゴウカザル四LV・Xに80ダメージだ。

残りHP30/110は決して喜ばしくないが、喜田は全てのサイドを開いた。もうサイコカッターの威力は上がらない、今なら押していける。

「さあ、俺のターンや！」

引いたカードはリョウの採集。SPポケモンと基本エネルギーを計二枚まで手札に戻せるサポーターだ。ここは使うの一択！

「サポーターのリョウの採集を発動。トラッシュのレントラーGL、レントラーGL LV・Xを手札に加える。そしてレントラーGL（80/80）をベンチに出して、ゴウカザル四LV・Xに炎エネルギーをつけるで！」

残りの展開は読めてきた。おそらくこの勝負で俺がこれ以上たねポケモンを出すことはないだろう。これで勝負を決めてやる。

「ゴウカザル四LV・Xでエルレイドに攻撃！ 炎の渦！」

炎の渦の威力は100。残りHP90/130のエルレイドにトドメを刺す。

「炎の渦の効果でゴウカザル四LV・Xの炎エネルギーを二枚トラッシュするけど、エルレイド倒したからサイド引くで！」

残るサイドはあと一枚。ようやくリーチに差し掛かった。あと一匹倒せば！

その時、不意に背後から由香里の声がかかる。

「先に三連勝したから杉森とフードコートで先にお昼食べとくで？」  
声のした方に振り返ると、由香里は三連勝したらもらえるカードをちらつかして会場から離れていく。わざわざ見せびらかすところがいやらしいし腹立たしい。

由香里が会場から出ると同時に長身の女の人が出てきた。パツと見、俺より大きい、百七十五センチくらいの背の高さで胸辺りまで濃い青色の髪を真っ直ぐ伸ばしている。綺麗だが、ちょっと怖い印象だ。

辺りが男ばかりなだけあって由香里同様に目立つのだが、なんと何かオーラが違う。そのせいで、悪い意味で目立つ。なんだか嫌

な予感がする。

その女の人は俺の二つ左の席に座ったが、妙に気になる。目の前の喜田も同様だった。

「こほん」

喜田がわざとらしく咳き込んだ。そのお陰で目の前の現実には俺は戻って来る。

「まだ勝負は終わってないぞ。俺のターン」

喜田の手札は僅か二枚。しかし、カード一枚で最大ハドローするポケモンカードでは手札の数は簡単にひっくり返ってしまう。

……のだが、喜田はここで長考してしまう。考えるなら手札を増強してからが普通だろうが。おそらく、喜田の手札に手札を増やすカードはないようだ。

「まずサーナイトをレベルアップさせる！」

サーナイトLV・Xにレベルアップしたため、HPが90/130に。さらに使えるワザが一つから二つに増えた。

今、サーナイトLV・Xには超エネルギーが一枚ついている。レベルアップ前のワザは超無無とエネルギーを三つ要求するため、このターンはダメージがないと踏んでいた。しかしレベルアップしてから使えるワザ、仕留めるは超エネルギー二枚あれば使えるワザ。しかもそのワザの効果は、サーナイトLV・X以外の互いのポケモン全員の中から残りHPが一番少ないポケモンをきぜつさせる。というとんでもないワザだ。

今一番HPが少ないのは30/110ゴウカザルLV・X。喜田の手札の残り一枚が超エネルギー及びそれを引き寄せる物であるなら……。

「サーナイトのポケパワー、テレパスを使う。相手のトラッシュのサポーター一枚をこのポケパワーとして使う。ハマナのリサーチを選択！」

ポケパワーからサーチに来たか！

「待ってたぜ！ 手札からパワースプレーを発動。自分の場にSP

ポケモンが三匹以上でなおかつ相手の番に相手がポケパワー使ってきたときに発動できるカードや。そのポケパワーを無効にする！」

最後の希望を失った喜田は金魚のように口をパクパクさせる。我に帰ると残りの一枚のカードを苦い顔でプレイする。

「サーナイトLV・Xに闘エネルギーをつけて、ターンエンド……」  
「よし、俺のターン！」

このドローで手札は四枚。手札0の喜田よりは良いが、手札を増強するカードがない。

「手札からポケターンを発動。ゴウカザル四LV・Xについているカードを全て手札に戻す！」

ゴウカザル四LV・Xについているカード、つまりゴウカザル四、ゴウカザル四LV・X、エナジーゲインを手札に戻す。

ゴウカザル四LV・Xがバトル場からいなくなったため、ベンチのレントラーGL80/80をバトル場に上げる。

「エナジーゲインをレントラーGLにつけ、更に手札の雷エネルギーもつける。そしてレントラーGLでサーナイトLV・Xに噛みつく攻撃！」

30ダメージを受けたサーナイトの残りHPは60/130になる。手札の状況を考えると次のターンで倒せる！

ターンが重なることに、喜田の顔が苦しそうになっていく。そんな喜田を見て少し心に余裕を持った俺は、プレイマットから顔を上げて試合を適当に見ているギャラリィを見渡した。

しかし、ギャラリィは皆が皆、同じテーブルを見つめている。

その視線を追い続けると、さっき見た青い髪の女がいるテーブルだった。何かあったのだろうか。

「俺のターン！」

喜田が自分の番を始める合図を放ったので、俺は再び目の前の戦いに集中する。

「手札の超エネルギーをサーナイトLV・Xにつける！」

どうやら喜田は超エネルギーを引き当てたようだ。これでワザ、

サイコロツクも仕留めるも使えるようになる。

「サーナイトLV・Xで仕留——」

「それでええん？ 仕留めるの効果は、互いの番にいるサーナイトLV・X以外で一番HPの低いポケモンを気絶させるやけど、その条件に適合するのはそちのペラップやで」

最初にベンチに戻ってから、ノータッチだったペラップ60/60。可哀想だがまあ忘れていても致し方ないかな。

「く、サイコロツク！」

威力は60。レントラーGLのHPが一気に20/80へと減少する。

「俺の番や！ レントラーGLをレベルアップさせ、そのまま攻撃。フラッシュインパクト！」

フラッシュインパクトの威力は70。残りHPが60/130のサーナイトLV・Xはこれで気絶。俺がサイドを一枚引くことによつてサイドを全て引ききつた。

「ありがとうございました」

対戦が終わり一礼すると、俺がカードを片付けるよりも早く喜田はテーブルを發った。

のこのこやつて来たスタッフから三連勝記念のプロモカードをもらい、やっとカードを片付けた俺は由香里の元へと向かわんと、数十分お世話になったパイプ椅子から腰を上げる。

その刹那、二つ隣の席からパイプ椅子が蹴飛ばされたかのような音と同時に、嫌な異臭とピチャピチャと何かが滴る音がする。

その元に目を移すと、あの女の人と戦っていた不健康そうな男が、体をくの字に折って会場で嘔吐していた。

休む間もなく、やけに用意周到な救護班らしき人たちに介抱されたその男はどこか他所へ運ばれていく。

その様子を見ていた女の人は、まるで何事にも興味がないような目をしてプロモカードももらわず人々の雑踏に紛れて行った。

何が起きたんだ……？

啓史「今日のキーカードはサーナイトLV・X！

ポケパワーで場を動きつつ、

仕留めるを使って勝負を決める！」

サーナイトLV・X HP130 超 (DP4)

ポケパワー テレポーターション

自分の番に、1回使える。自分のバトルポケモン、または自分のベンチポケモンを1匹選び、このポケモンと入れ替える。このパワーは、このポケモンが特殊状態なら使えない。

超超 しとめる

自分以外の、おたがいのポケモン全員の中から、残りHPが一番少ないポケモンのうち1匹を選び、きぜつさせる。

—このカードは、バトル場のサーナイトに重ねてレベルアップさせる。レベルアップ前のワザ・ポケパワーも使うことができ、ポケボディーもはたらく。—

弱点 超×2 抵抗力 なし にげる 2

## 6話 昔の約束

フードコートにやってきた。大概こういうところは相当な広さを誇り、人が多くて困るのだが由香里達を探すのに時間はかからなかった。

それもそのはずフードコートに入ると同時に石焼きビビンバを乗せたお盆を運ぶ由香里とすぐに出会った。

「勝てた？」

「当たり前やん、ちゃんとカードもらって来たで」

「まあそれくらいは当然やな。で、とりあえず杉浦も待ってるから席教えるわ」

今いるところからタカが待っているところまではそう距離はなく、ちよつと歩くだけで席に着いた。タカはラーメンを食べながらDSしている。

席について由香里はビビンバを置くと水取ってくると言って雑踏に混ざっていった。

「どやった？」

タカがスープをレンゲで掬いながら話しかけてくる。こつちを見てない。

「ちゃんと勝てたで。そつちの方は？」

「ここ来てからワイヤレス通じるようになって、今三戦目。ちょこちよこギリティナ出てきてめつちやうつといわ」

「パルキア入れてへんかったっけ」

「いつもとちやうPTでやってる」

「ふーん。とりあえず俺もなんか飯買ってくるわ」

「ゲームの方までまだ一時間あるからあんま慌てなくてもええで？」

「じゃあのんびり決めてくるわ」

そう言って、タカのいるテーブルを離れる。そんなお昼の一時だ。店を回ってうんうん言った割には、俺もタカと同じくラーメンを

食べることにし、ささつと食べるとデッキケースを直して午後ของเกม部門のためにDSを取り出した。

「あれ、由香里はゲームも出るっけ」

「あたしも出るよ？　ちゃんとDS持ってきたし」

と、ハンドバッグから黒いDSLiteを見せつける。

DSを出したのに入れ替わりにデッキケースを直しかけた由香里だが、手が滑ったらしくケースを床に落としてしまう。

しかも蓋がきちんと閉まっていなかったがために中のカードがこぼれ落ちている。

「おっと」

なんだか俺のせいで落とした気がしてなんだか悪い。という訳でもないのだが、脊髓反射的に落ちたカードを拾うのを手伝う。

由香里のカードは基本的にデッキシールドされているのだが、一枚だけデッキシールドのされていないカードが落ちていた。

他のカードがまだ拾われていないにも関わらず、先にそのカードを拾いあげる。

「なんだこれ」

裏面は普通のカードだが、表面の部分は剥がされ、剥がされたところにボールペンでイラストとテキストが書かれていた。プロシキカードかと思ったがそうでもないようだがなんだこれ。

プロシキカード・代理のカード。持って無いカードを代理で別のカードを入れて使うこと。

カード名は「マニの決意」とのことで、サポーターカードらしい。バクフーンを連れ、腕組みをした男がイラストにある。

そのカードテキストには、「約束を守る」。はあ？

なんだこれと思っていると、由香里がひったくるようにそのマニの決意を奪い取った。

「……」

急に手元のカードをひったくられたことに呆気にとられ、由香里を見つめる。

「な、なんでもええやん！」

顔を赤くして大きな声を出す由香里。よくわからないままこれまた反射的にごめんと謝ってしまう。

とはいえあのカードのことを思い返してしまう。あの字は筆跡からしても由香里のではない。力強くカクカク書かれた具合が男の字だと物語っていた。

まさか彼氏とかか！

一人でニヤニヤしていると、隣のタカが不審な顔でこっちを見てきた。

「なるほど、そういうことか」

確証を得るためにアタックを仕掛ける。

「な、何よ」

「誰からもろたん？」

「……」

自分でも余計に顔がニヤつくのを実感する。そして自分で自分が気持ち悪いとも思う。

「もー、鬱陶しいし隠すことでもないから言うわ」

開き直って白状モードか！ さあ真実はなんなのか！

「ほらあたしさ、中学んとき東京行ってたやろ？ 東京から大阪に戻るときにあたしと向こうの友達二人と作ってん」

もらった、ではなく作ったらしい。まあ自作カードなのは分かるが。

「離れても、ポケモンカードやってたらまた三人いつか会えるっていう約束こめて、な」

青春臭くて妬ましい。いや、でもポケカしてたらまたいつか会える？ 意味が分からん。

「やからポケモンカードで会うつっていう約束を守ろう！ って忘れへんようにね」

「なるほど」

あんましわからん。

そういえば、由香里は東京行く前はポケモンカードやってなかったのに、戻ってきたらポケモンカードをやっていたな。

その東京の友達らに影響されたんだろうか。

でもこれ以上根を掘るのはなんだか野暮っぽいから、今は遠慮しておこう。

さつさと残りのカードを拾い、ぐだぐだしていると、割りといい時間になっていた。

「よし次のゲーム部門もサクッと行こか！」

再び会場に戻ると、先程よりも大きいお友達が一段と増えていた。予想していたよりも多く、少し面食らいそうになる。

「来年のPCCの調整に来てるんやろな」

タカは俺の表情を察してか、声をかける。

PCCとはポケモンチャレンジカップの略で、毎年行われるポケモンの世界大会である。

各都道府県で予選を行い、その予選と東日本、西日本で行われる敗者復活戦の勝者が東京で更にトーナメントで戦い、そのうち何名かがハワイで行われる世界大会に行くのだ。

このバトルチャレンジはゲームもカードもPCCと同じルールなので、各環境を調べる絶好の場である。Wi-Fiとは違った臨場感もある。

「うーん、なんかちょっと緊張するな」

ちなみに俺は、PCCではカードではなくゲームで出場予定。というわけでここからが正念場だ。

「メタグロスで大爆発！」

「ディアルガのトリックルーム」

「ミュウツー、吹雪だ！」

「ダブルでこの指止まれ！」

「ギラティナのシャドーダイブだ」

声が飛び交う会場の中に俺はいなかった。

現在、ギャラリーに混じって遠目でタカを応援している。

距離があるのももちろんDSなんて見えず、かろうじて浮き沈みするタカの表情で試合の優劣を推し測るのみ。

俺は一回戦で手持ちのカイオーガが放った雷の威力が足りず、相手の攻撃を急所に受けてリズムを狂わされたために負けてしまった。  
「まさか一回戦で負けるってのはなあ」

「運ゲーで負けたんやろ？　しゃーないやん」

同じく一回戦負けの由香里が、ざまあねえと言わんばかりにやつきながら話す。

「くっ、めっちゃ腹立つ」

「あたしはカードでPCC出るから別にええんやけど、啓史はゲームやろ？　この調子やったら予選も危ういやん」

タカが大きくガッツポーズを作る。

俺らとは違って、きっちり三連勝をして記念品を受けとる。

「俺、やつぱさ」

「？」

「ゲームよりカードで出るわ」

「これまたずいぶん都合良い考えやん。ま、相手になっても手加減せーへんで？」

調子の良い由香里の返事を鼻でふんと笑って一蹴する。

そんなことをしているうちにどうやらタカも戻ってきたし、時刻も陽が沈み始める頃だ。半日くらい世話になったショッピングモールの離れ、俺たちは大阪の街へと戻っていく。

啓史「今日のキーカードはマニーの決意！

約束のカード、ねえ」

マニーの決意 サポーター

全国大会で再会する約束を守る。

サポーターは、自分の番に1枚だけ使える。使ったら、自分のバトル場の横におき、自分の番の終わりにトラッシュ。

## 7話 PCC大阪開戦！

「あつ、アイコさん。今着きましたよ」

『お疲れ様ね』

「とりあえずホテルにチェックインしてからポケモンセンターオーサ力にでも行ってみます」

『遊びに行かした訳じゃないわよ、ちゃんと仕事しなさい』

「分かってますよそれくらい」

『いつもはもつと大人数で行くんだけどもごめんね？ こっちもいろいろ忙しくて。言わなくても分かってるだらうけど』

「大丈夫です。任せてください」

『うーん、そう言われると逆に不安ねえ。とにかく、大阪はよろしくね。一之瀬くん』

PCC大阪地区予選が明日に控えた日の昼頃、新大阪駅に一人の男が現れた。

一之瀬と呼ばれた彼は、携帯電話の通話が切れたのを画面で確認する。通話相手は松野藍。クリーチャーズの社員であり、彼の上司である。

とある仕事のために彼は東京から大阪にやって来たのだ。

携帯電話を疊んでポケットに入れると、彼は新大阪駅の出口を指す。

来る二月下旬の土曜日。翌日が模試とぶつかるため、二日あるPCC大阪予選を、日曜日ではなく土曜日を選んだ。由香里ももちろん土曜日だが、タカは俺達の都合に合わせてくれた。

会場はインテックス大阪。大阪市の南西部に位置する建物で、こういうイベントにならなければ陽の目を浴びない埋め立て地である。

とはいえ割りりと頻繁にイベントは行われているが。

地元の地下鉄の駅で集合した俺達は、しばらく電車で揺られると、途中から中央線へ乗り換えて今度はコスモスクエア駅に行き、そこから更に南港ポートタウン線に乗り換えて二駅次の中ふ頭駅で降りる。

もちろん、電車に乗っている間は口を開けて天井を眺め、だらつと寝ている訳もない。

タカのようにゲーム部門出場者はギリギリまでポケモンを確認、及び努力値を振っていない場合はさっさと振る。ちなみにこの作業は電池との戦いであり、前日にきちんと充電しないと痛い目に会う。余談だが去年のタカはその目に会った。

今年からカードで出場する俺と由香利は、自分のデッキとスペアカードを見比べうんうん唸る作業をしなくてはならない。他のカードゲームとは違い、デッキが60枚以上ではなく60枚ジャストでなければならぬので、欲しいカードを全部詰めておくという訳にはいかないのだ。そもそもデッキ圧縮的に60枚を越すというような考えは普通はないのだが。

「啓史、コスモスクエア着いたで」

由香利が俺の右肩を結構な力でバシバシ叩きながら言ってくれる。痛いです。

適当に頷き、広げてたカードを慣れた手つきで手に持ったケースに直して席を立つ。そしてホームへと降り立ち、南港ポートタウン線へと向かおうとしていた時、背後から急に現れた人とぶつかった。「でふっ！」

後ろからの衝撃に耐えきれず、思わず前に倒れそうになる。

ギリギリのところで踏みとどまったが、手に持っていたカード数枚が手の中からこぼれ落ちる。線路に落ちなくてよかった。

「ごめん、大丈夫!？」

ぶつかった張本人が、慌てて重そうなショルダーバッグを下ろして落ちたカードを回収する。

幸いにもそんなにあちこちに散らばりまくったわけでもないので  
すぐに回収することが出来た。

「本当にごめんね」

「えっと、大丈夫です」

時間ギリギリだったらぶちギレだった。早めに家を出れて本当に  
良かった。

改めてぶつかった男を見れば、ひょろい体格で、髪型にもあまり  
特徴がなく、大学生のように見えた。この人にかろうじて印象をつ  
けるなら優男？

しかしまあ用は済んだわけだし、軽く会釈して立ち去ろうとする  
と、それを引き止めるように男が声をかけてきた。

「君たちはPCCに出るんだよね」

「はあ」

「僕も行くんだけど、連れて行ってくれないかな、この辺全然来な  
いもんだから分からなくて」

別に断る理由があるわけでもないのに、この優男と一緒に行くこ  
とにした。

男の名前は一之瀬 いちのせ 和也 かずや というらしい。

言葉の訛りが関西圏ではなさそうなので、どこの人かと尋ねたと  
ころ、なんと東京から来たらしい。

「なんで東京から大阪に来たんですか？」

「えーと、まあ仕事みたいなのかな」

仕事ってことはスタッフ？ 会場のスタッフって東京からわざわざ  
来てるの？ っていうか選手と同じ時間で来るってどーよ。

「ところで森くん達はカードでPCCに出るの？」

「えっとここにいるタカだけゲームで、俺と由香里はカードです」

「へー。それじゃあさっきのお詫びも兼ねて、僕が森ちゃんと宇田さ

んにプレゼントをあげよう」

と言うなり一之瀬さんはすぐさま重そうなシヨルダーバッグをそこそ漁り始めた。

一之瀬さんは横に広い直方体の段ボールを二つ取り出し、それぞれ俺と由香里に渡した。

「お？」

「それは『バトルベルト』。今年から公式大会で導入される機械で、TECKって会社で作ったんだよ。企画したのが高校生らしいけどすごいね」

バトルベルトはよく聞かし、玩具店などでシヨーウィンドウ越しに見たことはある。

一色のベルトにモンスターボールのような球体が六つついた機械で、一定の操作を行う事でモンスターボールがテーブルに変形し、そのテーブルを使ってポケモンカードを使うと鮮明な3D映像として実際にポケモンが動いてるように見える最新機械である……らしい。

もちろん、立派なものだけあって値段が相当なので買う気にはなれなかった。大会の予選はともかく本選ではこれが導入されるのだが、レンタル可能なのでそっちに頼るつもりだったものの、もらえるなんて嬉しい誤算。俺は一之瀬さんの手を握って何度もありがとうといいながらその手をぶんぶん強く振った。

「杉浦君はごめんね。今はゲームの方も作ってるらしいから、そっちが出来てまた会えたときに」

「あつ、ありがとうございます！」

しかしこんな高いものをくれるなんてただ者ではない。親しくなつてウルトララッキー。ここで運を使い果たしたかもしれない。

「箱のまま持っていくのは大変だし、大会まで時間があるからここで開けてみたら？」

一之瀬さんは荷物の減ったシヨルダーバッグを担ぎ直して提案する。

「よっしゃ、開けよか！」

段ボールに一切の配慮なく豪快に開けていった由香里を尻目に、俺も自分のを開けていく。

薄いブルーのバトルベルト。なかなかいい色だ。持った感じはやはり重みがあるのだが、これくらいはなんてことない。

「よし、着けたで」

今つけていたベルトを外して新たにバトルベルトをつける。

由香里も着けたらしく、自慢気に見せつける。色は薄い赤だ。

「似合ってる似合ってる」

一之瀬さんはご満悦らしく、俺たちのことを称賛する。

いやあ、しかし結局はほんと時間よりも早めに出てよかった。早起きは三文の得ということわざを初めて体で知った。

段ボールや梱包材等を駅のコミ箱に押し込み、説明書や備品を靴の中に入れ、目的地に向かい再び歩き出す。

「思ってたより遅くなったけど、そろそろ行こか」

コスモスクエア駅からようやく南港ポートタウン線に乗り換え、中ふ頭へ向かう。

予想通りであるが、南港ポートタウン線にいる人のほとんどがDSをいじくっている。

俺はゲームで出場しないのでこいつらすげえと遠目に見るも、隣にいるタカにしてはプレッシャーを感じているかもしれない。

この二駅の間は短く、中ふ頭駅に着いた。

乗客の大多数がこの駅で降りる。普段は使われなさそうな線なだけに多少は金が回るな、なんてどうでもいいことを考えていた。

中ふ頭駅は至ってシンプルな駅で、キップ売り場と改札とホームしかないといっても反論はないような小さい駅だ。そこがごった返すんだから大変大変。

人で溢れる改札をサクッと通り、駅から直結している白い橋を渡る。

橋を渡り終え、別れ道を右に進むとすぐにインテックス大阪が見

えてくる。

インテックス大阪は国際会議に使われることもあるらしく、そのときに旗をつけるであろう白い棒が風でカタカタ騒いでいた。そこから少ししてインテックス大阪の玄関口が見えてくる。

「ねえ、この辺りってコンビニとかない？ 喋り疲れて喉渴いちゃってさ」

一ノ瀬さんが尋ねてくる。

この人、出会ってからずっと喋りっぱなしなのだからそりゃ渴くだろう。が、

「ないです」

そう、全くない。

一ノ瀬さんが後ろにエフェクトが付き添うなほど露骨なりアクションをとった。

「ええ！？ お昼ご飯もなし！？」

「あ、でも会場内に売店みたいなのがいくつかあるからそこで弁当やらペットボトルやらありますよ」

「それならよかった」

とやりとりしてる間に、インテックス大阪の玄関を越える。すると開放的な空間が広がり、いくつか売店の姿が見える。

「ほら、あれとか売店ですよ」

「おお、ありがとう！ みんなも喉乾いてるんじゃない？ なにか買ってあげるよ」

「いや、いいですいいです」

いいですと言いつつ、めっちゃ欲しいです。でも露骨におごってもらうと悪い気がするからね。無駄な抵抗をして少しでもいい人っぽく装った方が印象がいい。

由香里はそのことを知っているのですごい白い目で俺を見つめた。どうせお前も欲しいだろうに。

「いやいや、案内してくれたお礼ってことで」

俺の呼び止めも虚しく一ノ瀬さんは売店の中に入ってしまった。し

めしめ。しかし同時にタカも一之瀬さんとは反対方向に去っていく。

「それじゃあまた後でな」

「おう」

タカはネットの友人と会いに行くため、ここからは別行動である。あとでまた合流することにはなっているのだが。

遅れて売店から出てきた一ノ瀬さんは、おにぎりと爽健美茶と、缶ジュースの温かいコーンスープを三つ持って来た。

「あれ、杉浦くんは？」

「別の友達のとこに合流しました」

「そっか。じゃあとりあえず二人にはコーンスープを。僕もこれからいろいろあるからまた後でね」

立て続けに一ノ瀬さんとも別れてコーンスープを手に持った俺と由香里の二人はただ立ち尽くす。なぜコーンスープ。とにかくもらったコーンスープをさっさと飲んで処理（入場の際に持ち物検査があり、そのときに飲み物は徹底的に調べられて面倒だから）して会場へ入場する。

「ゲームのカテゴリーBの最後列はこちらです！」

スタッフ専用の赤いウィンドブレーカーを羽織った男性職員が大きな声を張り上げる。

まだまだ寒さの続く二月。海に近いため冷たい海風もやってくるインテックス大阪で、ゲームカテゴリーBみたいな列に並ぶだなんて冷えて冷えてたまらない。

そんな行列を横目に、俺たちは手早く会場の方に進んでいく。ゲームと違ってカード出場選手は少ないため、列は並ばずさっさと中に入れるのだ。

会場入り口のスタッフに、だいすきクラブのカードと身分証明となる高校の生徒手帳を提示すると選手証を受けとる。

そのあと、荷物検査と金属検査を受ける。

そしてようやく会場内だ。俺と由香里は迷う暇なくカードの予選ラウンドが行われる方へ向かった。

啓史「今回のキーカードはガブリアスC L V・X！」

ポケパワーも強力やけど、なんといってもそれ以上の魅力はワザやな。

ドラゴンダイブに死角はなし！」

ガブリアスC「チャンピオン」 L V・X H P 1 1 0 無 (P  
t)

ポケパワー いやしのいぶき

自分の番に、このカードを手札から出してポケモンをレベルアップさせたとき、1回使える。自分のS Pポケモン全員のダメージカウンターをすべてとる。

無無無 ドラゴンダイブ

自分のエネルギーを2個トラッシュし、相手のポケモン1匹に、80ダメージ。次の自分の番、自分は「ドラゴンダイブ」を使えない。

—このカードは、バトル場のガブリアスC「チャンピオン」を重ねてレベルアップさせる。レベルアップ前のワザ・ポケパワーも使うことができる、ポケボディーもはたらく。—

弱点 無×2 抵抗力 — にげる 0

## 8話 決勝リーグ第一戦

「レントラーG L V・Xのポケパワー、輝く眼差しを発動。相手のバトルポケモンをベンチポケモンと入れ替えさせる！ ベンチのミュウとバトル場のピクシーを入れ替えさせ、レントラーG L V・Xで攻撃！ トラッシュボルト！」

よし、これでピクシーは気絶。最後のサイドを引いて俺の勝ち。予選第三ラウンドを勝ち抜いて決勝リーグに出場確定だ。

小さくガッツポーズを作った後、スタッフから決勝リーグ用のバトルシートをもらって予選会場から離れる。

決勝リーグの集合時間が思ってるより早いので、あまりのんびり昼飯は食えない。

もつと早く昼飯買つとくんだったなあと自らの判断の悪さを嘆く。一之瀬さんみたく早めに買うのが正解だった。

なんとなく携帯を開くと由香里からメールがあった。三分前に来たそれには、会場出口辺りに来いとだけ書いてあったので、仕方なくそこに向かうとやけに笑顔の由香里が待っていた。

「どやった？」

「俺決勝リーグ行きやで」

「へー、啓史も勝ったんや」

「お前はどうかん」

「予選くらい余裕に決まってるやろ？」

男子のように無邪気に笑う由香里。余裕余裕っていつか足元掬われそうなことを言いやる。

「飯食わへん？」

と言って由香里はハンドバッグを掲げる。

「どーせ売店込むやろと思っておにぎり作ってきてん。杉浦の分も作ってたんやけど、なんか知り合いとあつこのやたら値段高いレストラン行くとか言ってたから二人で食うで」

「おおつ、マジか！ ありがと。ええ子やなあ」

「ええ子ってなんやねん」

「とか言いながらめっさ笑顔やん」

「そんなええから！ はよ食べに行くで！」

再入場用のスタンプを押してもらい、笑いながら一旦会場を後にする。会場内の飲食は流石にマナー的にも気になるところだしね。

とりあえずインテックス大阪をうろついて適当なベンチを見つけ、二人腰を下ろす。

「啓史ってなんか苦手なおにぎりの具とかあったっけ？」

「なんやろ。ツナマヨとかは好きちゃうな、梅干しも食べへんことはないけどもあんまり」

しかしおにぎりの具なんてやりたい放題だから苦手な具と言われる。極論、ハバネロを突っ込んでもおにぎりに成りうる。

「ハバネロは？」

「ハバネロなあ。……は？」

「いや、せやからハバネロ食える？」

「まさかおにぎりにハバネロ入れたとか」

「割りと普通の選択枝やろ？」

「アホ言っつな。ってか何の具があんのか教えてーや」

「えー、そんな言ったらおもしろいやん。ロシアルーレットみたいなのを……」

「殺す気かい」

もはや呆れ調子でおにぎりを適当に一つ受けとる。

若干びくつきながら食べてみるとどうやら鮭フレークが入っていたようだ。まともでよかった。

「塩が利いててなかなかいけるやん」

「お茶いる？」

由香里がバッグから小さめの水筒を取りだし、水筒のフタにお茶を注ぐ。

「ありがと」

「もつと大阪城公園とか万博公園で食った方が風情あんのになー。何が悲しくてこんな埋め立て地で食うてるんやろ」

「俺に文句言わんというーや」

たとえそこに行つたとしても、なにより季節がまだまだ冬なので寒いなの、風情もないよ。

陽は照っているものの、前も言つたが埋め立て地だけあつて海に近いせいか、風が強いし冷たい。お陰で鼻水が止まりそうにない。海風本当に辛いぞ。

「やつぱでかい公園みたいなとこで食いたかつたなあ」

「やる？ あたし今それ言つたやん。あつそうそう」

「うん？」

急に話題の切り返しをしてきた由香里は、首からぶら下げた決勝リーグのバトルシートを指差す。

「啓史の番号何？ あたしは7やねんけど」

番号というのはバトルシートに書かれているものだ。この番号によつて対戦相手を決めるらしい。

「俺は15やつたかな」

「なんや、まあさすがに一回戦じゃ当たらんか」

「普通に考えて、順当に行けば準決勝で対戦か」

「決勝で当たるわけでもないねんなあ」

決勝リーグは32人で行われるトーナメントだ。また、今年からバトルベルトを用いて行われるため、場所的な問題で四試合ずつしか出来ない。同時に最大八人ずつ対戦する仕組みだ。

だから、一回戦は由香里の試合を俺が観戦することも出来るしその逆も然り。

観戦可能になるとカードプレイヤーのライフラインであるデッキの中身がバレてしまうが、バトルベルトにカードが登録されるとかでデッキ自体は変更不可能となっている。ゲームならばそれでも十分問題だが、カードならこれである程度条件緩和がされる。

「まあ由香里と公式戦なんて面白そうやし、頑張つて準決勝行くで」

「その前にくたばらんといてや？ あたしかてあんたと対戦したいんやから」

由香里が頬を緩ませていたずらに笑う。本当にこいつは……。

「ん？ なんかあった？」

「あ、いや」

思わず由香里の顔を見つめていた。昔よりも表情のレパートリーが増えた気がする。それが良いことなのか悪いことなのか。

一つため息をついて、残りのおにぎりにがつつく。

一回戦が始まろうとしている頃。出場選手は所定の位置に立たされる。

というのも、バトルベルトはポケモンを立体的に再現するための機械なので場所をそれなりに要する。

お陰で同時に複数人しか対戦出来ず、大会進行に時間がかかるデメリットもある。

指示通りにバトルベルトを操作すると、ベルトについているモンスターボール型のオブジェクトが変形してテーブルを形成する。

そして形成されたバトルベルトのデッキポケットにデッキを挿入し、シャッフルボタンを押すと、オートでシャッフルし出す。この瞬間にデッキはバトルベルトに登録され、この大会ではこの60枚しか使えなくなる。もし違うカードが一枚でも混ざればブザーが鳴って戦えない仕組みだ。

サイド六枚もセットされ、最初の手札の七枚を引く。

互いにたねポケモンをセットし、バトルの準備を整える。

「よろしくお願いします！」

対戦相手の西山 弦にしやまのゆづるの最初のバトルポケモンはミカルゲ、ベンチにはイーブイ。あたしのバトルポケモンはヒトデマンでベンチポケモンはなしだ。

「おれのターン！」

西山が先攻をとる。ミカルゲ60/60とイーブイ50/50という組み合わせではまだ相手のデッキを類推出来ない。

「イーブイに草エネルギーをつけ——」

イーブイに草エネルギーということはリーフィアがデッキにいる可能性が非常に高いか？

「ミカルゲのワザを使う。ダークグレイス！」

ミカルゲの体から真っ黒い霧のような何かが噴出され、ベンチにいるイーブイを覆っていく。

少ししてその黒い何かがすっと消えると、イーブイの代わりにリーフィア90/90が現れる。

「このワザは自分のデッキから自分のポケモンを進化させるワザ。その代わり、ダークグレイスを使ったミカルゲはHPを10減らさなくてはならない」

ミカルゲの右下に表示されているHPバーが僅かに減少し、50/60と表示される。

「よし、あたしのターン。まずは手札の水エネルギーをバトル場のヒトデマンにつけて、ベンチにタツツーを出すわ」

ヒトデマンの後ろに新たにタツツー50/50が現れる。

タツツーはこの後のための大事な種、今はそのための準備をしよう。

「手札からグッズ発動すんで。ゴージャスボール！」

「悪いけどそうはいかへん、ミカルゲのポケボディーの要の封印によつて、こいつがバトル場における限り互いにトレーナーは使えない！」

しまった。速攻を仕掛けるつもりが、こうもあっさり止められてしまうなんて。

更にこのミスで手札にゴージャスボールがあるのを露見させてしまった。

「……それならヒトデマンのワザを使うで。コスモドロー。相手の

場に進化ポケモンがおるとき、デッキからカードを三枚引く」

進化ポケモン、リーフィアがしっかりいてくれるお陰で序盤から簡単に手札増強は出来る。

「さつきミカルゲのダークグレイスで進化させたのが仇やったな。これであたしの番は終わりや」

由香里「今回のキーカードはミカルゲ。

序盤の展開役として最高のカード。

要の封印は超強力なロックポケボディーや」

ミカルゲ LV・39 HP60 悪 (DPt4)

ポケボディー かなめのふういん

このポケモンがバトル場にいるかぎり、おたがいのプレイヤーは、手札から「トレーナー」を出して使えない。

―― ダークグレイス

自分の山札から、自分のポケモン1匹から進化する「進化カード」を1枚選び、そのポケモンの上にのせ、進化させる。進化させた場合、自分にダメージカウンターを1つ乗せる。その後、山札を切る。

悪 おにび 10

弱点 ― 抵抗力 無・20 にげる 1

## 9話 一枚二枚

「おれのターンや。手札からキモリとシェイミをベンチに出すで」  
新たにキモリ50/50とシェイミ70/70とが西山のベンチに現れる。シェイミはランドフォルム、確かこのシェイミは……。

しかし幸いにもどちらもHPは高くない。もつともキモリに関しては進化すればHPは増えていくのだが。

「草エネルギーをシェイミにつけ、ミカルゲのワザ、ダークグレイスを発動や！」

ミカルゲから再び黒い霧が発せられ、ベンチのキモリを包みこむ。この自分のベンチのポケモンを進化させるというワザの怖いところは、ワザエネルギーを要しないところにある。その分ベンチが通常のプレイよりも育ちやすい。

だからこそ、ミカルゲは早めに叩かなくては。

「ダークグレイスの効果で、キモリをジュプトルに進化させる！」

黒い霧の中からジュプトル80/80が現れる。HPが増した分より倒しにくくなる。

「ダークグレイスを使ったミカルゲはHPを10減らす。これでおれの番は終わりや」

しかし、ミカルゲ40/60は仕留めることが出来る射程圏内に入った。

まずはこのターンで一匹！

「あたしのターン、ドロー！ 手札の水エネルギーをベンチのタツツーにつけ、タツツーをシードラ80/80に。バトル場のヒトデマンをスターミー80/80に進化させるわ」

もしトレーナーカードが使えたら、あたしの得意な速攻でミカルゲだけでなくさらにベンチにいるポケモンも狙撃出来たのだが、トレーナーカードはミカルゲのポケボディー、要の封印により阻止されてしまっている。ほんとにあのミカルゲうざったいたらあらへん

な……。

しかし、そこまで行かなくてもミカルゲ「だけ」ならなんとか倒せる。

「スターミーでミカルゲに攻撃や。大回転！」

スターミーが車輪のように素早く縦回転しながらミカルゲに突撃する。

攻撃を受けたミカルゲは要の石ごとぶっ飛んで派手に倒れた。HPゲージは40/60から0/60へ減り、ミカルゲは気絶。よし、と右手でガッツポーズ。

「水エネルギー一つだけで40ダメージ……。なんて威力やねんこいつ」

「でもその大回転のデメリットとして、次のターンにスターミーは攻撃できひんようになるで」

「なるほど。ならおれはリーフィアを新たにバトル場に出すで」

「サイドを一枚引いてターンエンドや」

「おれのターン！ ベンチのジュプトルに草エネルギーをつけ、ジュカインに進化させる！」

ジュプトルの体が白く輝きそのシルエットが大きくなると、ジュカイン100/100へと進化を遂げる。

「さらに手札からグッズを発動、プレミアボール。デッキまたはトラスシュからLV・Xポケモンを手札に加える。おれはリーフィアLV・Xをデッキから手札に加え、バトル場のリーフィアをレベルアップさせる！」

ミカルゲがいなくなったことによってポケボディー、要の封印の効果はなくなり互いにトレーナーカードが使えるようになった。先に相手に使われることによって、相手にとって有利に事が進んでいく。

そしてリーフィアは一瞬光を纏うと、リーフィアLV・Xとして新たに現れる。こちらHPは110/110。ジュカインにリーフィアLV・Xねえ。想像以上に厳しい展開やないか。

「リーファイアLV・Xのポケパワー発動、エナジー促成。自分の番に一度、手札の草エネルギーを自分のポケモンにつける！ おれはベンチのジュカインにつけてリーファイアLV・Xで攻撃、深緑の舞！」

エネルギー加速のポケパワー！ こいつが厄介ったらありやしない。しかし、これで相手は手札を使い切った。  
しかも。

「深緑の舞は草無で発動できるワザや。リーファイアLV・Xには草エネルギー一個しかついてへんから不発やな、ジュカインに草エネルギーをつけるやなんて初歩的なプレイングミスちゃう？」

西山はその反応が愉快だといわんかのようになり、はっはっはと豪快に笑う。

「そんな初歩的なプレイングミスはここにきてするやつはおらへんで。仮にも決勝リーグや。そやから当然このワザは決まる」

「どういうことよ」

「ジュカインのポケボディーは生い茂る。その効果によって自分の草ポケモンについている草の基本エネルギー一枚を、草の基本エネルギー二枚分として扱うことができる。だから、リーファイアLV・Xには枚数的には草エネルギー一枚しかついてへんけど、実際は二枚ついたものとして扱えるから深緑の舞は通る！」

リーファイアLV・Xの足元から風が吹き荒れると、それは緑色の竜巻になり、そのままスターミーを襲う。

「深緑の舞は自分の場にあるエネルギーの数かける10だけ威力があがる。今、おれの場にはリーファイアLV・Xに一枚、ジュカインに二枚、シェイミに一枚の合計四枚。しかもジュカインの生い茂るによって八枚と扱う。元の威力30に80加えて、合計110のダメージをスターミーに与える！」

「ひゃっ、110ダメージ!?」

竜巻に巻き込まれたスターミーがようやくそれから解放される。しかしHPは無常にも0。たった1ターンでこんなに食らうだなん

てのはさすがに予想しなかった。

「だったらあたしはシードラをバトル場に……」

「サイドを一枚引いてエンド！」

まだこちらの場は全然整っていないというのに、相手は完全に準備も終わって攻撃体制に入っている。五ターン目にいきなり崖っぷちだ。これが決勝リーグ……。

それでも負けるわけにはいかない。なんとしてでも逆転してやる。「速攻型が速攻型に負けるなんてなあ。でもあたしの方が展開力では勝つで！　まずは手札からサポーター発動、ハマナのリサーチ。デッキから基本エネルギーまたはたねポケモンを二枚まで選び、手札に加える。タツツーとヒトデマンを手札に加えてベンチに出し、更にタツツーに水エネルギーをつける」

すぐさまベンチにポケモンが溜まり始める。このままあたしの番が終われば勝利が確実だった西山は僅かに表情に悔しそうな色を見せる。

「グッズ、ゴージャスボールを使い、その効果でデッキからキングドラを手札に加え、バトル場のシードラをキングドラに進化させる。もう一枚グッズを使うで、不思議なアメ！　場のたねポケモンに手札の進化ポケモンを重ねて進化させる。あたしは手札のキングドラをベンチのタツツーに重ねて進化させる！」

よってあたしの場合には水エネルギー一つついたHP130/130のキングドラが二匹と、新たなヒトデマン50/50。戦う準備は万端だ。

「手札を二枚トラッシュし、キングドラでリーフィアLV・Xに攻撃、ドラゴンポンプ！」

キングドラが頭を後ろに少し傾けるがそれをすぐさま前に戻し、勢いよく口から水を吹き出した。

水はホースから吹き出るような優しいものではなく、龍の形をしたものでそれがリーフィアLV・Xに突撃していく。

リーフィアLV・Xに水龍が打ち付けられた後、水は再び龍の形

を成してベンチにいるジュカインも襲う。

リーファイアLV・XのHPは70/110、ジュカインのHPは80/100まで削られる。

「リーファイアの抵抗力は水120。ダメージは軽減できたがエネルギー一枚でこの威力……」

「そっちのに比べたらまだマシっていう自覚はあんねんけどな。ドラゴンポンプは手札を二枚トッシュでき、トッシュした場合はワザの威力が20加算(元の威力は40)されてベンチのポケモンにも20ダメージ与えられるようになるワザ。これであたしの番は終わりやな」

「よし、おれのターン。手札の草エネルギーをリーファイアLV・Xにつけてキングドラを攻撃。深緑の舞！」

「またもや激しい竜巻攻撃があたしの場を抉るように襲いかかる。」

「今、相手の場にあるエネルギーは草エネルギーが五枚。それにベンチにいるジュカインのポケボディー、生い茂るによって草エネルギーは一枚で二枚扱いになるので、つまり相手の場に十枚エネルギーがあるということになり、深緑の舞は元々の威力30に100が足されて合計130ダメージ。」

「キングドラが一撃、か……」

「キングドラ0/130のHPをきっちり削ってきた。こういうことを想定してもう一匹のキングドラを用意したのは正解だったな。」

「あたしは次のポケモンに、ベンチにいるキングドラを選ぶわ」

「よし、サイドを一枚引いてターンエンド」

「ともかく何をするにしても目の前のリーファイアLV・Xを倒してから……。ただ単純にワザの威力が高いだけでなく、水タイプに対する抵抗力もしっかり持っている。こいつを攻略するにはどうすれば……。」

由香里「今回のキーカードはリーファイアLV・X。

強力なパワーで相手を押しきれ！

ポケパワーとワザとが強力なシナジーをもつ一匹や」

リーファイアLV・X HP110 草（DP4）

ポケパワー エナジーそくせい

自分の番に、1回使える。自分の手札のエネルギーを1枚選ぶ。  
その後、そのエネルギーを、自分のポケモンにつける。このパワーは、このポケモンが特殊状態なら使えない。

草無 しんりよくのまい 30+

自分の場のエネルギーの合計×10ダメージを追加。

「このカードは、バトル場のリーファイアに重ねてレベルアップさせる。レベルアップ前のワザ・ポケパワーも使うことができ、ポケボディーもはたらく。」

弱点 炎+30 抵抗力 水-20 にげる 3

## 10話 スピードとテクニック

あたしのサイドはまだ五枚。それに対して相手のサイドは四枚。と劣勢に追い込まれている。

さらにサイドだけでなく、場の整い具合でも劣っている。

あたしのバトル場には水エネルギー一枚のキングドラ130/130。ベンチにはエネルギーなしのヒトデマン50/50。

その一方で西山のバトル場は草エネルギー二枚ついたリーフィアLV・X70/110、ベンチには同様に草エネルギー二枚のジュカイン80/100、草エネルギー一枚のシェイミ70/70。

しかも相手のリーフィアLV・Xの深緑の舞が決まると先のターンみたいにあたしのキングドラは一撃で倒されてしまう。

だというのに、今のあたしの場と手札ではリーフィアLV・Xを倒すことが出来ない。むしろよくキングドラを一匹残せたなと褒めてほしいくらいだ。

そんなとき、不意にあの言葉を思い出す。

『余裕で勝ってるよりさ、苦戦してるくらいの方が楽しいだろ?』

中学時代、二年間東京で過ごしたあたしと親友になってくれた奥村翔の言葉だ。

常に前を向いていて、くじけたってすぐに立ち上がって。笑顔の眩しい少年だった。

そう。これくらい負けてるときのドキドキが楽しいんだ。

逆転への道が切り開かれるかもしれない。この期待がカードの醍醐味!

「手が止まってるけど諦めたんか?」

「何言ってるねん。勝負はこっからやで! あたしのターンっ!」  
来いっ、逆転への道標!

……そう願って引いたカードはポケモンの道具、達人の帯。

「来たで、リーフィアLV・Xをトラッシュに送る用意しときや!」

「……はあ？ どうするつもりやねん」

「ふふつ、あたしはサポーターカードのバクのトレーニングを使うで。その効果でデッキから二枚ドロ。更にベンチにタツツ（50/50）、フローゼルGL（80/80）をベンチに出す！」

これで手札が残り三枚。エネルギーをポケモンにつけたかったが、キングドラのワザの仕様からリーフィアLV・Xを倒すには我慢するしかない。

「キングドラにポケモンの道具、達人の帯を付けないで。達人の帯をつけたポケモンのHPは20アップし、与えるワザのダメージも20アップ！ デメリットとして、このキングドラが気絶したときに相手はサイド二枚引くことができる」

「わざわざサイドをくれるようなもんやな。いくらHPをあげてもたかが20、おれが草エネルギーを次のターン誰かにつけるだけで気絶やん。それにワザの威力をあげたかてリーフィアLV・XのHPは——」

「そうはいかへんねんで。手札を二枚トラッシュしてキングドラで攻撃、ドラゴンポンプ！」

水エネルギーとクロツグの貢献を手札からトラッシュ。これあたしの手札は0。

キングドラ150/150が噴射する水が水龍となり、バトル場のリーフィアLV・Xとベンチのジュカイン60/100を襲う。

「ドラゴンポンプは手札を二枚トラッシュすればワザのダメージが20上がり、ベンチポケモン一匹にも20ダメージ与えることが出来るワザや。それに達人の帯の効果も合わせて威力を20上げて、リーフィアLV・Xの抵抗力は水タイプから受けるワザの威力を20下げるもの。60ダメージをリーフィアLV・Xが受けたところで、残りHP10となってギリギリ耐えきる！」

「忘れもんやで」

バトル場の横においたカードを、西山に見せる。

「バツ、バクのトレーニング……！」

「バクのトレーニングがバトル場の横にあるとき、このターンのワザの威力を10上げる！ サポーターは使っとバトル場の横において、自分の番にトラッシュすんのはもちろん常識やんな？」

水龍がリーファイアLV・Xにその身をぶつける。リーファイアLV・Xは衝撃で体が後ろに飛ばされながらHPバーを緩やかに減らしていく。その残りHPはもちろん、0/110だ。

「くそつ、せやったらシェイミをバトルに出す」

「サイドを一枚引いてターンエンドや。追い付いたで」

「よしっ、おれの番や」

西山の手札はこれで三枚。決して多いとは言えない手札でどう仕掛けてくるか。あたしの場には達人の帯で強化されたキングドラ150/150がおる。迂闊には相手は動けないはずだ。

「キングドラが怖いな……。でもまた一撃で倒せる程のパンチ力はどうあらへん。なら粘って機を伺うまでや！ おれはシェイミに草エネルギーをつけてレベルアップ！」

シェイミの体が薄い光に包まれて輝く。HPバーも70/70から100/100に上昇だ。

「シェイミLV・Xのポケボディー、感謝の気持ちによってこのシェイミ以外の全ての草ポケモンのHPは40上昇する！」

HPを上げることによって耐久力を増して、チャンスを狙う作戦かしら。ベンチのジュカイン60/100も100/140までHPがアップする。

「そしてサポーター、デンジの哲学によって手札が六枚になるまで、つまり六枚ドロ。ベンチにイーブイ(50/50)を出してシェイミLV・Xで攻撃、シードフレア！」

シェイミLV・Xが、蛭に似た光を身体中に帯びる。

「シードフレアの効果により、手札の草エネルギー二枚をベンチのイーブイにつける。シードフレアは自分の手札の草エネルギーを好きなだけ選び、自分のポケモンに好きなようにつけれる効果や。つけた場合、つけたエネルギーの枚数かける20ダメージを追加、二

枚つけたため元の威力40に40を加えた80ダメージ!」

シェイミLV・Xを包んだ光がレーザーとなって真っ直ぐキングドラを貫く。150もあったキングドラのHPがあっさり70/150、半分を切ってしまった。

「あたしのターン、ヒトデマンをスターミー(80/80)に進化させ、ユクシー(70/70)をベンチに。そしてこのときユクシーのポケパワーのセットアップを発動や、セットアップ。手札が七枚になるようにデッキからドローする。あたしの手札は0。やから七枚引くで」

キングドラのドラゴンポンプは高火力を保つために手札がたくさん必要とされる。そのための対策としてのドローソースはしっかり用意してある。

デッキから引いたカードは、フローゼルフB LV・X、夜のメテナンス、シードラ、ハンサムの操作、水エネルギーが三枚。これで残りのデッキも26枚、引きすぎもまた破滅。そろそろデッキの方にも気をかけなくちゃならないかな。

「スターミーのポケパワー、アクアサイクロンの効果によってトラッシュの水エネルギーを手札に加え、それをベンチのタツツに付ける。さらにタツツをシードラ(80/80)に進化させ、グッズカード、夜のメテナンスを使うで」

「夜のメテナンス……。トラッシュの基本エネルギーがポケモンを三枚までデッキに戻すカードか」

「あたしはタツツ、シードラ、キングドラの三匹をデッキに戻してシャッフル! 手札の水エネルギーを二枚トラッシュしてキングドラのドラゴンポンプで攻撃!」

ドラゴンポンプがあたしのデッキのメインとなる攻撃ワザ。威力ももちろん、ベンチも狙え、そしてなにより必要なエネルギーが少ない!

「シェイミLV・Xは水タイプに抵抗力がある。達人の帯で威力が上がっても食らうダメージは60!」

「言うてもドラゴンポンプの効果で、ベンチにおけるイーブイにも20ダメージ」

シェイミLV・X40/100を襲った水龍がベンチのイーブイにも食らいつく。イーブイのHPバーは削られて30/50。

シェイミLV・Xのポケボディー、感謝の気持ちのせいでジュカイン100/140のHPは40も上がった。20ずつ削ってもキリがない。

それにどうせシェイミLV・Xは次のターン、ポケボディーを継続させるためにベンチに引込むはず。

だったら次に出てきそうなイーブイのHPを少しでも削るべき。

ベンチを攻撃出来るからこそ広がる選択肢、それがこのデッキの強みだ。

「おれのターン！ シェイミLV・Xの草エネルギーをトラッシュし、ベンチのイーブイと入れ換える。そしてイーブイをリーフィア（本来のHPは70/90だが、シェイミLV・Xのポケボディーによって110/130）に進化！ さらに手札からサポーター、オーキド博士の訪問を発動。デッキから三枚引いて、手札から一枚デッキの底に戻す。そしてベンチのシェイミLV・Xに手札の草エネルギーをつけ、この瞬間にリーフィアのポケボディー発動。エナジールフレッシュ！」

「っ……」

「リーフィアがバトル場において、自分のポケモンに手札からエネルギーをつけたときに発動し、エネルギーをつけたポケモンのHPを20回復させる」

のびをするかのように体を立たすシェイミLV・XのHPバーが緩やかに上昇し、60/100へ。

「リーフィアで攻撃、アロマスリープ！」

リーフィアから淡い緑の霧が発せられ、キングドラを包み込む。その霧の中でキングドラのHPが10/150まで落ち込んだが、なんとか間一髪で持ちこたえる。

がしかし、あろうことがキングドラは横になり始める。程なくHPバーの少し上に眠りの表示が現れた。

「アロマスリープの追加効果でキングドラには眠ってもらうよ。ターンエンド」

「けどこのポケモンチェックでオモテ出したらええだけや」

ポケモンチェックのときにコイントスでオモテを出せば、眠りは回復になる。ここで眠りから回復出来なければ相手からダメージを受けるだけのサンドバッグになってしまう。

コイントスボタンを押すと、データで処理した判定が来る。コイントスによるイカサマやいざこざを減らすための処理だ。

「よしオモテや。キングドラはこれで起きるで」

「……せつかく眠らせたったのに」

「へへん、残念やったな」

これでこの番キングドラは自由に動ける、しかしキングドラ10/150のHPは僅か。次のターンにはほぼ間違いなく気絶させられてしまうだろう。

しかも達人の帯をつけているせいで、このキングドラが気絶した場合は相手はサイドを一枚多く引くことが出来る。

現在どちらのサイドも残り四枚、ここで二枚差をつけられるのは辛い。中盤になると挽回するのが難しくなる。

「あたしのターン。まずは手札の水エネルギーをフローゼルGLにつけ、手札からサポーター、ハンサムの捜査を発動。相手の手札を確認して、自分か相手のどちらかを選択し、選択されたプレイヤーは手札を全てデッキに戻してシャッフルし、五枚ドロ―する。手札見せてや」

西山の手札はジュカイン、リーフィア、ジュカイン、不思議な飴の四枚。いい手札とは言えないそれを、わざわざ戻して五枚引かせる義理はない。

「あたしは自分の手札をデッキに戻してシャッフル、五枚ドロ―。よし、手札の水エネルギーを二枚捨ててキングドラで攻撃。ドラゴ

ンポンプ！」

リーフィアの抵抗力も水なので受けるダメージは20軽減されて60ダメージ。これでようやく残りHPは50/130だ。そしてドラゴンポンプの効果でシェイミLV・Xに20ダメージを与えたが、まだ40/100。あと二発食らわせてやらないと気絶させれないが。

「よし、今の一撃で道は開いたで。そろそろこの対戦、終いにさせよか！」

由香里「今回のキーカードはシェイミLV・X

草タイプ専用のポケボディーは超強力！

HP40アップは文字面以上に厄介や」

シェイミLV・X HP100 草（破空）

ポケボディー かんしゃのきもち

自分の場の草ポケモン全員（「シェイミ」はのぞく）の最大HPは、それぞれ「40」ずつ大きくなる。自分の場で、すでに別の「かんしゃのきもち」がはたらいっているなら、このボディーははたらない。

草無無 シードフレア 40+

のぞむなら、自分の手札の草エネルギーを好きなだけ選び、自分のポケモンに好きなようにつけてよい。その場合、つけたエネルギーの枚数×20ダメージを追加。

「このカードは、バトル場のシェイミに重ねてレベルアップさせる。レベルアップ前のワザ・ポケパワーも使うことができ、ポケボディーもはたらく。」

弱点 炎×2 抵抗力 水-20 にげる 1

## 11話 隠し玉

「おれの番や！ リーファイアでキングドラに攻撃イ、アロマスリーブ！」

リーファイアからキングドラ0/150にトドメの攻撃が放たれる。キングドラについていた達人の帯の効果で、西山はサイドを二枚引くことができる。

「あたしはシードラを次のポケモンにするわ」

「サイドを二枚引いておれの番は終わりやな」

これで西山のサイドは二枚、あたしは四枚。一気に二枚の差が開いてしまった。

西山のバトル場は草エネルギー二枚ついたリーファイア50/130、ベンチには同じく草エネルギー二枚ついたジュカイン100/140、そして草エネルギー一枚のシェイミLV.X40/100。あたしの場には先ほど出たばかりの水エネルギー一枚ついたシードラ80/80、ベンチにはユクシー70/70、スターミー80/80、そして水エネルギー一枚ついたフローゼルGL80/80。よし、これであと二匹倒せばおれの勝ちやな！」

「ふん、そんな簡単に言わんというや。こっからはもっと険しい道にしたるから」

余裕をかます西山にピシヤリと言い切つてやるが、西山は半信半疑といったような眼差しでこちらを見てくる。算段は無いわけではない。まずはこの番から！

「あたしのターン、ポケブローア+を二枚同時に発動や」

「二枚同時！？」

「そうや、このカードは一枚だけで使用したときと、二枚同時に使ったときでは効果がちゃうで。二枚同時に使用したときの効果は、相手のベンチのポケモンを一匹選んで、バトルポケモンと入れ換えさせる！」

「ということ……」

「そう、ベンチのシェイミLV・Xとその鬱陶しいリーフィアを交代してもらうで」

天井の方からマジックアームのようなものが伸びてきて、シェイミLV・Xとリーフィアはそれぞれがつつり捕獲してそれぞれのポジションを無理やり入れ換えさせる。これでシェイミLV・Xにダメージを与える。

「ユクシーをベンチに出して、ポケパワーのセットアップを発動。このカードを手札からベンチに出したときだけ発動出来て、手札が七枚になるよう、つまり今のあたしの手札が一枚やから六枚山札からカードを引く！」

ポケブロー+だけでカードを二枚も消費してしまったんだ。しつかりユクシー70/70で補給をしておこう。

「手札からサポーター、ミズキの検索を発動。手札を一枚デッキに戻して、デッキから好きなポケモンを手札に加える。あたしはキングドラを手札に加えて進化させんで」

「倒しても倒しても……！　　どんだけ出てくんねん！」

西山がキングドラ130/130を指差して焦り始める。

「それはそっちの勝手な予測やろ？　さて、手札を二枚捨ててキングドラのドラゴンポンプで攻撃！」

先ほど手札を補充したばかりだから、捨てるカードなら山ほどある。

キングドラから放たれた水の龍はまずシェイミLV・Xを攻撃、抵抗力で20ダメージ軽減させても40+20-20=40ダメージ。ともかくシェイミLV・XのHPはこれで0/100となる。

「ドラゴンポンプの効果でリーフィアにも20ダメージ！」

水の龍はシェイミLV・Xだけでなく、ベンチのリーフィアにも攻撃する。ダメージを受けたリーフィア30/130は弾き飛ばされて西山の側まで転がる。

「シェイミLV・Xがワザで気絶したことによってサイドを一枚引

くで。更にシエイミLv.Xが気絶したことで、ポケボディーの感謝の気持ちによって上がったHPは元に戻る！」

「そっちが狙いやったんか！」

西山の場の全ての草ポケモンのHPバーが減り行く。これでリーフィアのHPは0/90、ジュカインは60/100となる。

「リーフィアもこれで気絶でサイドもう一枚引くで！ これであたしも残ったサイドは二枚や」

そして西山はベンチに残った唯一のポケモン、ジュカインをバトル場に出す。

「おれのターン！ サポーターのバクのトレーニングを使い、デッキから二枚ドロースる」

バクのトレーニングの真髄は、バクのトレーニングがバトル場の横にあるとき、ワザの威力が10増えることにある。

このターンで何かしら攻勢に転じるのかしら？

しかし、西山は一向に動じない。歯がゆそうにしている。

「くそつ、進化ポケモンばかりでたねポケモンがっ……」

ボソツと呟いたそれを聞き逃さなかった。なるほどね、いくら進化ポケモンがあってもたねポケモンがいなければ邪魔にしかない。

おそらく手札のほとんど全部が進化ポケモンなのだろう。それはやることは少ないに決まってるだろう。

「ジュカインの攻撃、リーフブレード！ 攻撃と同時にコイントスをする。……オモテ、よってリーフブレードの威力は20追加される！」

リーフブレードの元の威力は50。コイントスで20、さらにバクのトレーニングの効果で10上がって計50+20+10=80ダメージ。

ジュカインに大きく腕の葉で切りつけられ、苦痛に歪むキングドラのHPは50/130となる。

「これで次のターンのジュカインの攻撃が通れば、コイントスに関

わらずキングドラは気絶するで！」

「通れば……ね」

「なっ!？」

「あたしの番、やるで。この番の攻撃で決着をつけるで」

「ドラゴンポンプをしてもジュカインのHPは削りきれへんやる！」

「あら、いつあたしがキングドラはドラゴンポンプしか使えないって言っただ？」

「えっ？」

「隠し玉はこういうときに使うもんやで、キングドラでジュカインに攻撃。アクアストリーム！」

キングドラの足元から激しい水流がジュカインを巻き込む形で発生する。

「アクアストリームはトラッシュにある水エネルギーを好きなだけ選択し、そのエネルギーをデッキに戻してその戻した数かける10ダメージを与える。あたしはトラッシュにある全ての水エネルギー、十一枚をデッキに戻すで」

抵抗力を加味しても、 $10 \times 11 = 20$ ダメージ。これではジュカイン60/100も耐えることは出来ない。

水流から解放されて完全にのびてしまったジュカイン0/100が気絶してしまったことで、西山にはもう戦えるポケモンがない。よって、あたしの勝ちだ。

「なかなか楽しかったで。でも、まだまだやな」

無事一回戦は突破。これで二回戦へ進める。それでも啓史と戦うにはまだまだ勝ち進まなくてはならない。そして翔たちとの約束を果たすためにはもっと勝たなくちゃいけない……。

「お疲れ様」

無事初戦を終えて戻って来た由香里に対して声をかけてやる。

「ありがと、啓史もしっかりな」

「当たり前や」

由香里がすっかり一回戦を勝ってきたんだ、もちろん俺も負けられない。

とりあえずこの初戦はしっかり勝って、後の弾みにしなくちゃ。

「あ、一之瀬さん」

由香里が呟くのになぞらい、同じ方を向く。やあ、と片手を上げてこちらに合図する。

「二人とも調子はどう？」

「あたしらどっちも予選勝って、今あたしが一回戦勝ち抜きました」「すごいね、さすが僕が見込んだことはある」

「それにしてもバトルベルトすごいですね、あんなエフェクト出たり風がビューン吹いたりしたりしてもうほんとわーっ、ってなりました」

「あはは、そう言ってもらえると嬉しいね。僕らが開発したわけじゃないけど。おっ、今やってる試合は終わったみたいだね」

「……、啓史何さつきからボツと突っ立ってんねん。出番やで」

「え、ああそっか」

「緊張してんの？」

「いや、まあ考え事しててん」

「そんな分かりやすい嘘つかんでええやん」

「そんなときは楽しめばいいよ。難しいことを考えずに好きなよう、思いつきりゃればいいさ」

「そうですね」

それが出来ねーから困ってるんだよ！ 残念ながら完全に上がってしまった俺には効果は今一つだ。そんなこと言われると逆に負担になってしまう。

「そろそろ行きや」

由香里に促されて俺は勝負へ向かう。

案内通り、対戦の所定位置に立つ。向こうから対戦相手がやって

きたのだが、その相手のことは忘れもしない。

この前のバトルチャレンジで、突然吐いた人の対戦相手だ。肩より長い青髪の長身の女性。近くで見るとかなり威圧感を放っていて、もしかして体が震えているかもしれない。

見た感じに強そうで、自分が負けるイメージしか浮かばない。こんなの相手に楽しめとか、ビルから飛び降りると同義。って弱気になつてどうする！

「よ、よろしく……」

「……」

睨まれたと思う。その冷たい視線に思わず視線が逃げる。

「啓史、頑張りやー！」

くっそ、これまた嫌なのと当たってしまったんちゃうか。

由香里「今回のキーカードはキングドラ。」

なんといってもワザエネルギーが少ない上に、

威力も抜群！ あたしのお気に入りや」

キングドラLv.52 HP130 水 (DP5)

―― アクアストリーム 10×

自分のトラッシュの水エネルギーを好きなだけ選び、相手プレイヤーに見せて、そのエネルギーの枚数×10ダメージ。その後、そのエネルギーをすべて山札にもどし、切る。

水 ドラゴンポンプ 40+

のぞむなら、自分の手札を2枚トラッシュしてよい。その場合、20ダメージを追加し、相手のベンチポケモン1匹にも、20ダメージ。

弱点 雷+30 抵抗力――にげる 1

## 12話 嫌な予感

重苦しい雰囲気の中、黙々と俺の一回戦が始まろうとしていた。対戦相手の和田<sup>わた</sup> 奏<sup>かなで</sup>は、その優しそうな名前とは正反対の異様なまでの威圧感を放っており、恐怖感までも覚える。とはいえポケモンカードの大会だろ……。なんでこんな怯えなきゃならないんだ。

「私のターン」

開始時の互いの場合は、先攻の和田のバトル場にはニョーラ60/60、ベンチにはゴニョニョ50/50。俺のバトル場にはゴウカザル四90/90でベンチは空だ。

「私はニョーラに悪エネルギーをつけ、ワザを発動。かすめ取る」

ニョーラが俺の手元まで軽い身のこなしでやって来ると俺の右手に向けて鋭い爪で引っ掻いてきた。

「いって」

手札が一枚だけ弾かれてこぼれ落ちる。

「かすめ取るは相手の手札にあるワザマシンまたはポケモンの道具を強制的に山札に戻させるワザだ」

落ちたカード——ポケモンの道具、エナジーゲイン——を拾ってデッキポケットに挿入してシャッフルさせる。

なんだ、その程度なのかとかえってやや怯んでしまった。ビビりすぎてただけだな、違うない。

決勝トーナメント一回戦、落ち着いていこう。深く息を吸って気持ちを落ち着かせる。

「俺のターンだ！ 手札の炎エネルギーをゴウカザル四につけ、ベンチにレントラーGL（80/80）を出して……。くそ、エナジーゲインがデッキに戻ったせいでワザ使えへんやん。ターンエンドや」

「私の番だ、ドロー」

この瞬間、自分が普段ならしないミスを犯したことに気づく。

手札のサポーター、アカギの策略を使うのを忘れてしまった。このカードを使えば、デッキに戻されたエナジーゲインをサーチすることが出来たのに。

全然気持ち落ち着いてねえし。どう考えても上がってる、リラックスしる俺！

「手札の悪エネルギーをニユーラにつけ、ニユーラをマニユーラに、ベンチのゴニョニョをドゴームに進化させる」

どちらともHPは80/80、この程度のHPなら俺のカードの打点を考えれば一撃圏内だ。

「そしてサポーターカードハマナのリサーチを発動。デッキからユクシーとニユーラを手札に加える」

デッキからたねポケモンまたは基本エネルギーを二枚まで加えるサポーターか。二枚ともたねポケモンを加えたということは。

「私はニユーラ(60/60)をベンチに出し、そこからユクシー(70/70)もベンチに出してポケパワー発動をする」

手札には相手のポケパワーを無効にする効果を持つグッズ、パワースプレーがある。しかし、発動条件を満たすためにはベンチにSPポケモンがあと一匹必要、これではユクシーのポケパワーを防げない！

「ユクシーのポケパワー、セトアップを発動。手札が七枚になるように、五枚ドロ！。そして達人の帯をマニユーラにつける」

達人の帯の効果でマニユーラのHPと威力が20ずつ上がる。マニユーラのHPは100/100！

「マニユーラで削ぎ落とす攻撃」

鋭い爪でゴウカザル四を切り裂く。その瞬間！

「っ、ゴホッゴホッ、うっつ！　ゴホッ」

急に鳩尾を殴られたような……錯覚、いやこれは錯覚とかじゃあ……ない。完全に痛覚だ。

辺りを探るも、当然誰かが殴った訳もない。

殴られたような衝撃の正体に疑問を持ちながら鳩尾をさする。何

が起きたんだ。

「ゴウカザル四の弱点は水かける2。よって40に達人の帯で20足され60を二倍して120ダメージ」

そんなん気絶に決まってるやろ……。ゴウカザル四のHPは90/90しかないんやから。

俺の次のポケモンはレントラーGLしかない。

「サイドを一枚引いてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！ 手札からサポーターのアカギの策略を發動。その効果でデッキからアカギの策略、エナジーゲイン、雷の基本エネルギーを手札に加える」

アカギの策略はサポーター、ギンガ団の発明と名のつくカードと基本エネルギーをサーチするサポーター。その効果でアカギの策略をサーチすれば使い回せる。今度は忘れずに使ってやったぞ。

「さらに、SPレクターを使うで。手札を一枚戻してデッキからSPポケモン、レントラーGL LV・Xを加えて、手札からガブリアスCをベンチに出して、バトル場のレントラーGLをレベルアップさせる！」

ポケモンが絶えることだけは絶対にしちゃいけない！ 戦えるポケモンがいなくなるとどんな有利でも負けになる。ガブリアスC 80/80をベンチに出し、レントラーGLもレベルアップして110/110へとHPを上げる。

「レントラーGL LV・Xがレベルアップしたときにポケパワーが發動や。輝く眼差し！」

レントラーGL LV・Xの眼が急に眩く輝き、フィールド全体が光で見えなくなる。視界が戻ると、相手のバトル場にはマニョーラではなくニョーラが立っている。

「輝く眼差しはレベルアップしたとき、相手のポケモンを強制的に入れ換える効果や」

「……ふん」

「さらにレントラーGL LV・Xに雷エネルギーをつけて、ポケ

モンの道具、エナジーゲインをつける。エナジーゲインがついているSPポケモンは、ワザエネルギーが無色一個分減る！これで攻撃や。フラッシュインパクトオ！」

レントラーGL LV.Xが雷を纏いながらニユーラに突進していく。突き飛ばされたニユーラのHPは一撃で0/60に。

「フラッシュインパクトは威力60の大技やけど、反動として自分のポケモン一匹に弱点と抵抗力を無視して30ダメージを与える。俺はガブリアスCにそのダメージを与えさす」

会場の天井付近から一筋の稲妻がガブリアスC50/80に突き刺さる。これくらいは必要経費だ。

ワザの処理が終わり、和田が次のポケモンを繰り出す。読み通り、マニユーラが再び場に現れる。

「ふうっ、サイドを一枚引いてターンエンド」

謎の鳩尾への痛みもようやくマシになり始め、だんだん楽になってきた。

「わたしのターン。ゴニョニョとダークライをベンチに出す」

ベンチに新たにゴニョニョ50/50とダークライ80/80が現れる。

たねポケモンを出せば出すほど、たねポケモンを狙って攻撃するこちら是有利になるのだが、一体どうしてだ。向こうも俺のデッキのスタンスを、少なくともさっきのプレイングで見抜けるはずだ。

「サポーター、ミズキの検索を使用。手札を一枚戻してデッキからバクオングを加え、ドゴームを進化させる」

ミズキの検索は手札を一枚戻して好きなポケモンをデッキから一枚加えられるサポーター。それによってバクオング130/130を呼び出したのか。

「不思議なアメを使い、ベンチのゴニョニョをバクオングに進化させる」

「なっ！」

不思議なアメはたねポケモンを一、または二進化ポケモンに進化

させるグッズ。それによつてバクオング130/130が二匹も並んだ。なるほど、無計画にたねポケモンを出した訳ではないか。

これで和田のポケモンは100を超えるHPをもつポケモンが三匹！

俺の攻撃の幅を狭める気が。

「バクオングに悪エネルギーをつけ、マニョーラでレントラーGL LV・Xに攻撃する。削ぎ落とす」

再びマニョーラが鋭い爪でレントラーGL LV・Xを襲う。

「がつ……ゴホッ！ うっ……」

と同時に再び激しい衝撃が鳩尾を襲う。少し足がフラツとしてバランスを失いかけた。何なんだよ畜生！

削ぎ落とすの元の威力40に達人の帯の打点20を足して60ダメージ、残りHPは50/110。次の削ぎ落とすは耐えれない。

そつちがこつちの攻め手をあぐねてくるなら……！

「俺のターン！ アカギの策略を発動し、その効果でデッキからアカギの策略、SPリーダー、雷エネルギーを手札に加え、レントラーGL LV・Xに雷エネルギーをつけてその上SPリーダー発動や！」

SPリーダーの効果によつて手札のゴウカザル四 LV・Xをデッキに戻してガブリアスC LV・Xを新たに手札に加える。

「そんでワープポイント発動。互いにバトル場のポケモンとベンチのポケモンを入れ換える！」

バトル場の二匹と、ベンチにいるガブリアスC、ユクシーの足元にそれぞれ青い渦が現れて合計四匹を飲み込む。そして俺のバトル場にガブリアスC、ベンチにレントラーGL LV・X、和田のバトル場にユクシー、ベンチにマニョーラが現れた。

ユクシー……だと？

なぜこのタイミングで一番HPの低いユクシーをバトル場に出す。是非とも倒してくれと言っているようなものじゃないか。

これは誘いなのだろうか。しかし今の俺はその誘いに乗らざるを

得ない。

「まずはガブリアスCをレベルアップ！そしてレベルアップしたときにポケパワー、癒しの息吹きを発動！」

ガブリアスC LV・X80/110が現れるや否や、白い優しい息を吹き掛ける。それに包まれたガブリアスC LV・X、レントラーGL LV・XのHPバーはみるみる回復していく。

「このポケパワーはレベルアップしたときに一度使え、自分のSPポケモンのHPを全快させる」

これで二匹ともHPは110/110に戻る。マニョーラの攻撃が一回分無駄になったことにもなる。しかし、和田は眉一つも動かさない。ここまで読んでいたか、それともただ動じないだけか。まさに霧がかかっている。

「ガブリアスC LV・Xを逃がしてレントラーGL LV・Xを新たにバトル場に出す」

ガブリアスC LV・Xに逃げるエネルギーは不要だ。それを見越してのワープポイントだが、本当にこれでいいのか……？動じない和田の佇まいが俺に迷いを産み出す。

「せやったら、手札の炎エネルギーをトラッシュして攻撃や。トラッシュボルト！」

レントラーGL LV・Xの目の前に炎のシンボルマークが現れると、レントラーGL LV・Xはそれを噛み砕いて体から赤と黄の色を持つ電気を放電、ユクシーを攻撃する。

ユクシー70/70に対し、このワザはエネルギーを手札からトラッシュしないと使えないが威力は70。ドンピシャでユクシーは気絶させた。

「ダークライをバトル場に出す」

「サイドを一枚引いてターンエンド！」

ダークライを出す。……またHPの高くないたねポケモンだが何のつもりだ。

少し苦戦気味か……。観客席からじゃあ何も出来ないのが歯がゆい。

ちから能力。突如何人かのポケモンカードゲームプレイヤーに宿った不思議な力。

現在、全国に何十人かいる能力者は不思議な特性を持つ。

例えば今、森啓史くんと戦ってる和田奏。彼女も能力者だ。

その能力は内側衝撃。ワザのダメージが衝撃となって対戦相手を内側から襲う。

見てとれるだけで森くんは既に二撃もらっているようだ。

あまりダメージを受けすぎると勝負以前に倒れかねない。なんとか頑張ってくれ……。

「一之瀬さん、なんか啓史の様子、変じゃないですか？」

隣にいる宇田由香里さんが僕に尋ねてくる。

「そう……かな」

彼女には果たしてどう答えるべきか。

啓史「今回のキーカードはマニョーラ！」

特色あるポケパワーが鍵や。

ワザもなかなかの威力と効果を持つで」

マニョーラ L V . 3 0   H P 8 0   水   ( D P 4 )

ポケパワー   あくにそめる

自分の番に1回使える。このパワーを使うときに、自分のバトル場にいたポケモン全員は、この番の終わりまで、悪タイプになる。  
(そのポケモンがバトル場をはなれたなら、この効果はなくなる。)

―― シャドーチャージ

自分の山札の悪エネルギーを2枚まで選び、自分のポケモンに好きなようにつける。その後、山札を切る。

悪悪 そぎおとす 40

相手の手札が6枚以上なら、その手札が5枚になるまで、オモテを見ないでカードを選び、トラッシュ。

弱点 鋼+20 抵抗力 | にげる 0

### 13話 窮地

「わたしのターン。バトル場のダークライをレベルアップさせる」  
わざわざダークライ80/80をバトル場に出した理由はこれか！  
ポケモンのレベルアップはバトル場でしか出来ない。逃げるエネルギーのロスを考えて、ユクシーを俺に倒させるように仕向けたのか。

それをようやく悟ったのかと嘲笑うようにダークライLV・X100/100がこちらを見つめる。

「サポーターのデンジの哲学を発動し、六枚引く」

デンジの哲学は手札が六枚になるよう山札からカードを引くカード。和田の手札は0。なので引けることの出来る最大の枚数分、六枚和田はカードを引く。

「ダークライLV・Xに悪エネルギーをつけて攻撃。闇の咆哮」

ダークライLV・Xが深く息を吸うと、鼓膜を引き裂くかのような雄叫びを発する。ような、とは言ったが本当に耳が……！

思わず両耳を塞いで両膝を地につける。

かろうじて目で場を確認すると、バトル場にはさっきまでベンチにいたはずのガブリアスC LV・Xがバトル場にいた。

ようやくダークライLV・Xから発せられる音が聞こえなくなったのを確認して耳のガードを剥がす。ベンチにはさっきまでバトル場にいたレントラーGL LV・X90/110が。しかし闇の咆哮は威力10のワザのはず。なぜ20ダメージも受けたのか。

「闇の咆哮は攻撃後、相手のバトル場とベンチのポケモンを入れ換えるワザ。さらにダークライLV・Xのポケボディー、ダークシャドーによつて悪タイプについている悪の基本エネルギーはすべてこのカードをつけているポケモンの、バトルポケモンに与えるワザのダメージは、すべて+10される」という効果を持つ」

これじゃあさっきのターンは完全に俺のプレイングミスじゃあな

いか。くそっ！

「俺の番や！ サポーターのアカギの策略を発動してデッキからアカギの策略、ポケターン、雷エネルギーを手札に加えてポケターンを発動してバトル場のガブリアスC L V・Xを手札に戻すで」

ポケターンは自分のSPポケモンを手札に戻すグズカード。ガブリアスC L V・Xのポケパワーをもう一度使いたい。

ガブリアスC L V・Xがバトルを離れたことでレントラーGL L V・Xがバトル場に出る。

「ガブリアスC（80/80）をベンチに出し雷エネルギーをつけて、更にゴウカザル四（90/90）をベンチに出す！」

攻撃の主力ばかり来て、サポート役のポケモンが全然来ない。こうなった以上、少しのプレイングミスも許されない。

そしてこないだのチャレンジ広場。和田の対戦相手が嘔吐したのと、今ここで俺が鳩尾を殴られたような衝撃はきつと同じ原因かもしれない。もしかしたら負けると医務室行きか、最悪の場合は……。

何で俺がこんな目に遭うんだよ畜生！

「手札の雷エネルギーをトラッシュしてダークライL V・Xに攻撃、トラッシュボルト！」

ダークライL V・Xは幸いにHPは高くない。この一撃だけで30/100まで削りきった。次の番でレントラーGL L V・Xの噛みつくが決まれば気絶させることが出来る。

しかしどうせポケボディーを活かすためにベンチに戻して置物として機能するだろう。

「わたしのターン。月光のスタジアムを発動してダークライL V・Xをベンチに逃がし、バクオングをバトル場に出す」

月光のスタジアムは悪、超タイプの逃げるエネルギーを不要にするスタジアム。これで逃げるエネルギー1だったダークライL V・Xはエネルギーのロスなく逃げる事が出来る。

そしてあらかじめ悪エネルギーを一つつけていた方のバクオング130/130がバトル場に出てきた。

「バトル場のバクオングに悪エネルギーをつけてベンチのマニョーラのポケパワー悪に染めるを使用」

「悪に染める？」

「森くんっ、それは自分のバトル場のポケモンを悪タイプに変えてしまうポケパワーだ！」

一之瀬さんが向こうから声をかけて解説してくれる。

ちよつと待て、悪タイプに変えるだと？ それじゃあ。

「バクオングの騒音攻撃」

和田がコイントスボタンを押す。このワザはコイントスを二回行い、一回目がオモテなら相手のバトルポケモンに50ダメージ。ウラなら相手のベンチ全員に20ダメージ。二回目がおモテなら相手を混乱に。ウラなら相手はトレーナーカードが使えなくなるものだ。処理がややこしいカードでもある。

「オモテとウラだ」

「……くっ！」

さっきと一緒に。バクオングが騒ぎ始めるや否や鼓膜が破けそうな騒音が……。しかもこんなに苦しんでるのが俺だけのようで、周りの人はなんともないみたいだ。

この一撃でレントラーGL LV・Xは相手のベンチのダークライLV・Xのシャドーダークの効果を含め50+20=70ダメージを受け、残りHPは40/110。

何より次のターン俺はトレーナーが使えなくなる。このデッキはトレーナーに依存しているものが強い、それを封じられるのはかなり手厳しい。

「俺のターンや……」

体の内側から何かが吹き出しそうな吐き気を感じた。ここはグツと堪えて耐える。なんでこのタイミングで。

ところで騒音によってトレーナーが使えなくなるのはこのターンのみ、次のターン以降はまたコイントスだ。このターンはいつも通り行こう。

相手のダークライLV・Xを倒せばマニョーラとのコンボでバクオングの火力は上がらない。

だがしかし……。ここは欲を張ってマニョーラを倒す方がいい。

マニョーラには達人の帯がついている。このマニョーラを倒すとサイドを二枚引けて俺は有利に立てる。残り二枚になれば死にかけのダークライLV・Xとバクオング一匹を倒すだけで勝てる。この変な対戦からおさらば出来る。そしてそのための用意もある。

「まずはクロバットGをベンチに出す。そしてポケパワー、フラッシュバイツ！」

クロバットG80/80はベンチに現れると同時に、電光石火の速さで和田のベンチのマニョーラに噛み付いた。

「フラッシュバイツはクロバットGを出したときだけ使え、相手のポケモン一匹にダメージカウンターを一つ乗せれる。さらにもう一匹ベンチにクロバットGを出してまたマニョーラにフラッシュバイツや！」

これでマニョーラのHPは80/100。あと一息だ。

「バトル場のレントラーGL LV・XとベンチのガブリアスCを入れ換えんで」

レントラーGL LV・Xの逃げるエネルギーは0リスクなしで逃げれるのも強みだ。

「そしてガブリアスCに雷エネルギーをつけてレベルアップ！そしてレベルアップしたときにポケパワー癒しの息吹発動！」

このポケパワーは前にも使ったようにレベルアップしたときに自分のSPポケモンのHPを全快させるもの。ダメージを受けていたレントラーGL LV・Xは110/110に回復。それ以外はノーダメージなので効果はない。

「ガブリアスC LV・X（110/110）で……」

攻撃しようとした。しかし、思うように攻撃出来ない。またしてもブレイキングミスをしてしまった。

ガブリアスC LV・Xのドラゴンドライブで攻撃しようとしたが

エネルギーが一つ足りない！

ドラゴンダイブは相手のポケモン一匹に80ダメージを与えられる大技で、これが決まればマニニューラを倒せる。はずなのだが、これじゃあマニニューラを倒せない。

「クソっ、爪で切り裂く攻撃！」

追加効果も何もない単調な攻撃が、相手のバクオングのHPを30だけ削った。

「わたしのターン。手札の悪エネルギーをダークライLV.Xにつける。マニニューラの悪に染めるを発動し、バクオングの騒音攻撃」

またか。しかもコイントスの結果もさっきと同じオモテとウラ。

マニニューラのポケパワー悪に染めるで悪タイプになったバクオングに、ダークライLV.Xのポケボディーのダークシャドーも絡んでガブリアスC LV.Xの受けるダメージは70だ。これで残りHPは40/110になる。次に騒音のコイントスでオモテが出ればダークシャドーや悪に染めるうんぬんに関わらず即死である。

ただかろうじてコイントスの判定はあくまで二分の一。決まらないときは決まらないはずだ。

さて、バクオングが深く息を吸い込み全身から騒音を出そうとしている。マニニューラとかの殴り殴られはともかく、さっきのこともあって音はヤバイ。またあの吐き気が来るのだろうか。

そう構えていると、バクオングの体中から不愉快極まりない音が遠慮なく発せられる。

慌てて耳を塞いだが、ダメだ、まるで意味がない。

というより衝撃自体は耳からでない。これは内側、体の中から来てる！

「うっ！」

猛烈な気分の悪さ故に耳を塞いでいた手を外し、バトルテーブル隣に立て掛けた鞆からおにぎりのゴミを入れっぱなしにしていたビール袋を取り出し、

「うぶっ！」

吐いた。耐えれなかった。いいやいつそのこと吐いた方が楽だと判断した。

そのお陰で口の中には吐いた後特有のクソ苦く夏の湿気よりはるか不愉快な胃酸の苦味でいっぱいだ。

「はぁ、はぁ、はっ……。ゴフツガハッ」

息を落ち着かせようと必死になり、鞆の中を再び漁ってお茶を取り出し流し込む。

お茶は空になったが口の中は幾分マシだ。ゲロ袋は何故か慌ててやってきたスタッフが回収してくれた。

しかし、袋はあれだけだから、次吐きそうになるともう地べたに吐くしかないな。

さっきのニユーラとかマニユーラとかと比較して考えるとこの衝撃は威力に比例しているのだろうか。

バクオングのタフな100/130を削るのは難しいのだから、やたりマニユーラをきっちり倒しておきたい。

もうプレイングミスは出来ない。サイド枚数は有利でも体がもたん。なんとしてもあと数ターンでケリをつけたいものだ。

だがしかし俺のデッキの特性であるスピードを活かすためのトレーナーが封じられた今、チャンスはあるのか？

「啓史どないしたんやろ……」

森くんと話しているときはかなり強気な彼女だったが、今はその力強さが言葉から感じられない。

そんな宇田さんを見ているのがやはり辛い。こういう現場は既に何度か出会っているが、やはり慣れるようなものではない。

しかし森くんもすごい精神力だ。和田奏の攻撃にあそこまで耐えて、しかも吐いてもそれでも立ち上がって勝負を続けようとする。

そして精神力だけではなく、プレイングミスによる綻びが何度も

浮き上がったりはしてるが、デツキの構築自体は丁寧だ。あんな状態でもまだサイドは上回っている。

だが和田奏の場の様子を考えると、そろそろアレが来る。アレを喰らうと流石に森くんでも戦えなくなってしまう。

予選を見た感じ「そういった意味で」和田奏を倒せそうなプレイヤーは彼と宇田さんとあと二人ほどいた。彼ら全員にあらかじめ布石を打ったのはやはり正解だったようだ。

手元の携帯電話の様子を確認してから、僕は一人トイレに向かうことにする。

啓史「今回のキーカードはダークライLV・Xや

ポケボディーで悪タイプの火力が上がる！

そして技も変わった特徴を持ってるぞ！」

ダークライLV・X HP100 悪（DP3）

ポケボディー ダークシャドー

自分の悪ポケモンについている「悪の基本エネルギーカード」はすべて、「このカードをつけているポケモンの、バトルポケモンに与えるワザのダメージは、すべて『+10』される。」という効果を持つ。すでに自分の別のポケモンの「ダークシャドー」がはたらいっているなら、このボディーははたらない。

悪悪無 えいえんのやみ 40

相手をねむりにする。ポケモンチェックのとき、このねむりで投げるコインの数は2回になり、すべてオモテが出ないとねむりから回復せず、すべてウラなら、そのポケモンはきぜつする。

—このカードは、バトル場のダークライに重ねてレベルアップさせる。レベルアップ前のワザ・ポケパワーも使うことができ、ポケボディーもはたらく。—

弱点  
闘  
×  
2  
抵抗力  
超  
-  
2  
0  
にげる  
1

## 14話 打ち克て！

能力ちからの与える影響は多大だ。

かろうじて分かっていることは、それらは人間の負の感情に発現すること。そして、対戦で負けてしまうとその能力は失われたこと。これにはトリックがあるのだが今は後にして、何よりもとにかく、能力者を倒すことが先決である。

しかしそれが大変だ。能力者を倒してくれ、分かりましたと承諾してくれる人はなかなかいない。というよりもいる方が少ないのは言うまでもないだろう。わざわざ危険な目をしてまで対戦を受けたがる人は大概野次馬精神でかつ身の程知らずのような人だろう。

だからこそ、能力者と戦うことになった人には仕方ないことだが事前に知らせたりすることはしない……。だがそれでも可能な限りの協力はする。

そして、僕。いや、僕たちとしては誰が能力者を倒せるかということが知りたい。彼に和田奏を破る力があるかどうか。

吐いた後、もう一度場全体を睨むように見直す。

今の俺のバトル場は雷エネルギー二枚ついたガブリアスC L V・X40/110。ベンチにはエナジーゲインと雷エネルギー二枚あるレントラーGLLV・X110/110。後はゴウカザル四90/90、クロバットG80/80が二匹。ちなみに俺の手札は二枚、サイドは四枚。

一方和田のバトル場には悪エネルギー二枚あるバクオング100/130。ベンチには達人の帯一枚と悪エネルギー二枚あるマニユーラ80/100、バクオング130/130、悪エネルギー二枚のダークライLV・X30/100。

そして和田の手札は四枚でサイドは五枚。サイド枚数はこちらの方が少ないのだが、場の具合を見る限り和田の方に優勢が傾いている。

先のターンで仕留めれなかったマニニューラを、今度こそ倒してやる。

「俺の番だ」

空回りでもなんでもいい、とにかくにも心で負けたら糸が切れてぶっ倒れてしまう。さっきから来る衝撃とは違う疲労も来てる……気がするからだ。

「まずはサポーター、ハマナのリサーチ発動！ その効果で俺はこの二枚を加える！」

ハマナのリサーチは基本エネルギーまたは、たねポケモンを合計二枚まで手札に加えるカード。その効果によってユクシーと炎エネルギーを手札に加える。

「ガブリアスC LV・Xに炎エネルギーをつけ、ユクシーをベンチに出してセットアップを使い、山札から五枚カードを引く！」

ユクシーはベンチに出したときに手札が七枚になるようにカードを引くことが出来るポケパワー、セットアップを持つ。今の手札は二枚、だから五枚ドロというわけだ。

がしかし引いたカードの大半がトレーナーカード。バグオングの放った騒音によって封じられた今、それらを使うことは出来ない。

「攻撃だ、マニニューラにドラゴンダイブや！」

叫び調子な上に元からの疲労もあり、どうでもいい気休めの冗談を口からこぼす余裕がない。

ワザの指示を受けたガブリアスC LV・Xについている炎エネルギーと雷基本エネルギーをそれぞれ一枚トラッシュすることで、ガブリアスC LV・Xは高く跳躍してそのまま流れ星かのようにベンチのマニニューラ目掛けて頭から突っ込む。

地響きがきそうな、ズシンと派手な音が響き、煙が起こる。土煙の中から一匹、バトル場に跳躍して戻るガブリアスC LV・Xに

対し、マニニューラ0/100はそのまま泡を吹いて倒れ伏す。

ドラゴンダイブは相手のポケモン一匹に80ダメージ与え、その後エネルギーを二枚トラッシュするワザ。残り80/100しかなかったマニニューラは、これできつちり気絶というわけだ。

「サイド二枚引いて俺の番は終わりや！」

「私のターン」

いちいちこのリアクションの無さというか感情の無さにも飽きてくる。どうしてここまで無表情でいられるのか。

「手札のダークライLV・Xに悪エネルギーをつけてバクオングで騒音攻撃」

さっきのターンとやることが全く一緒だ。

そんなことよりまた騒音がくる。もう吐けまい、とりあえず耐える俺！

騒音によるコイントスは二回ともウラだった。つまり、このワザによって俺はベンチポケモン全員に20ダメージ受け、次のターントレーナーカードが使えなくなる。

バクオングの放つ騒音はさっきとはなんだか音の出方が違う。さっきのは高音が耳をつん付くようなメチャクチャなモノだったが、今度はとんでもない重低音だ。空気の揺れが俺の体全体まで震えさせる。

「あぐあ、くう……。はあ、はあ……」

頑張つて吐くだけは堪えた。だが俺のベンチはレントラーGLV・X90/110、ゴウカザル四70/90、クロバットG60/80、クロバットG60/80と合計80ダメージ。一度目のコイントスがオモテならばバトルポケモンが50ダメージを食らう効果なので、そう考えれば総計のダメージでは結構手痛い。

だがもし次のターンも騒音の一回目のトスがウラでガブリアスC LV・Xが生き残れば、ドラゴンダイブでダークライLV・Xを攻撃して倒せる。厄介なあいつを倒せる。

「行くで……。俺のターン！」

相変わらずの気分の悪さとどこから来る疲労感で、もはや俺はどうにかなりそうだった。ふらふらする。口の中が酸っぱくて気持ち悪い、頭が痛い……。

いつもは早く諦めたり、苦痛からは逃れたがる俺なのに、なんでこんなになっても戦ってるのだろ。こいつなんかには負けたくない。そう感情が俺の尻をひっぱたき、まだだまだと言ってくる。

とは言ったものの、相変わらず手札はトレーナーカードでみっちり埋まっている。バクオングの騒音のせいでそれらは一切使えない。かろうじて一枚あるエネルギーでなんとかするしかない。

「炎エネルギーをガブリアスC　LV・Xにつけて攻撃っ、爪で切り裂く！」

ガブリアスC　LV・Xの爪による一撃がバクオングの胸にクリンヒット。これで残りHPは70/130。変なことが起きない限りこのバクオングを倒す算段は完成した。次の番にドラゴンダイブで倒せる。

どちらにせよ次の番の騒音によるコイントス、二回目でおモテを出してくれたら手札のポケターンでガブリアスC　LV・Xを回収したりエナジーゲインを付けれるのだが……。

また、今さらだが手札のパワースプレーが腐った。このカードは相手のターン、自分の場にSPポケモンが三匹以上いるときで相手がポケパワーを使うときに発動出来、そのポケパワーを使えないカード。

マニニューラを倒した今、相手の場にポケパワーを使うポケモンがないから完全に用なしだ。こちらは相手の番に使うカードだったから、『次の自分の番は使えない』というバクオングの騒音のタイミングから逃れていて使える唯一のトレーナーだったのだが。まあまたポケパワー持ちが出るかもしれないから一概に無駄とはまだ言えない。

「私のターン。ベンチシールドをダークライLV・Xにつける」  
ベンチシールドとはこの道具を持っているポケモンがベンチにい

る限りダメージを受けなくなるポケモンの道具だ。

ベンチへの奇襲を最も得意とする俺のデッキにはある程度有効なメタカードとなる。

「バクオングで騒音攻撃」

もう何度目の騒音かは忘れた。もはや数えたくない。オモテとウラを出したこのワザは俺のガブリアスC L V・Xに50ダメージを与え、次のターンの俺のトレーナーを封じ、そして俺の体も掻き回す。

「おっ……、ああ！」

僅かな気力を振り絞って吐くのは堪える。いくら胃からやってきた酸っぱさが口を巡り、唾と一緒に食道に押し戻す。

「はあ、はあ、……次はこいつだ！」

残りHP40だったガブリアスC L V・Xはこの一撃で気絶してしまった。俺はベンチに控えていたレントラーGL L V・Xを新たにバトル場に出す。

「サイドを一枚引いて私の番はこれで終わりだ」

深く息を吸い込み、吐く。心と体のリズムを整え、よしと一人気合いを入れる。バクオングともこのターンでケリを着けないとな。

「俺のターン！ 炎エネルギーをベンチのゴウカザル四につけて……」

俺の残りサイドは二枚。そしてバトル場にいるレントラーGL L V・Xのトラッシュボルトで70ダメージ与えれば残りHP70のバクオングをきっちり倒し、騒音の不快感からも解放される。

だがしかし何か嫌な予感がする。どうしてだ？ こいつは倒すしかないだろう。倒せば俺もトレーナーカードを使えるし、ダークライL V・Xを倒せば勝てる。街行く人に尋ねても、百人中百人がそれでいいだとゴーサインを出してくれてもなんらおかしくはないはずだ。

でもそれじゃあ何かが駄目だ。なんだ？ 何が駄目なんだ？ 分からない。でも立ち止まってもいられない。

もう限界を遥か昔に通りすぎた俺には立ってるだけで自画自賛出来る。だなんて思うと余計疲れてくるな。

深いことは考えるな。そうだ、やっちなえ。早くこの勝負を終わらせるんだ。いや、でもそれじゃあ危なすぎる。何が危ない？

……分らない。このモヤモヤが、判断力に靄をかける。

「くっそ、手札の雷エネルギーをトラッシュしてトラッシュボルト！」

雷のシンボルマークを噛み砕いたレントラーGL LV・Xがほとばしる稲妻をバクオングにぶつける。

まともに受けたバクオングはそのまま千鳥足になってふらふらとするも、やがて前に倒れて動かなくなる。

「っしやあ！ サイドを一枚引いてターンエンドや」

これで残りサイドは一枚。そして和田の最後のバトルポケモンはダークライLV・Xだ。

ダークライLV・Xがバトル場に出ると、原因不明の冬の冷氣とは違う寒気を感じ取った。鳥肌が立つ。手が震える。おいおいどうしてだ。

「私の番。……これで終わらせてやる、永遠の闇！」

「なっ！？」

ターン開始と同時にいきなりのワザ宣言。トレーナーカードは使わなくていいのだろうか。和田は俺と違ってサイド枚数がまだまだある。なのに終わりだってどういうことだよ。

当惑してるうちにダークライLV・Xが両手を広げると、ダークライLV・Xを中心に真っ黒い何かがドーム状に広がっていく。

「なんやつ！」

その黒い何かは俺のバトル場のレントラーGL LV・Xだけでなく俺ごと包み込んでいく。

「ど、どうなってんねん……」

その黒い何かは俺たちを包んだまま、晴れる気配が一向にない。何にも見えない。自分の手も、もちろん手札も、バトル場も何も見

ることが出来ない。むしろ案外この状況で冷静にいられる自分が不思議で仕方ない。

「なんやねんこれ……」

「永遠の闇の元々の威力は40だがダークライLV・XのポケボデーのダークシャドーによってダークライLV・Xについている基本悪エネルギーの数だけ、つまり三枚なので30ダメージ追加されて70ダメージだ」

これでレントラーGL LV・XのHPは残り20/110……だろうか。

「さらにこのワザの効果で相手をねむりにし、ポケモンチェックのときにこのねむりで投げるコインの数は二回になる。すべてオモテが出ないとねむりから回復せず、すべてウラなら、そのポケモンはきぜつさせる」

どうでもいいが和田の初めての長台詞だ。何も見えないからカードテキストの読めない俺に対するささやかな配慮なのかもしれない。だとしたら確信犯だな。

それにしても本当になんだこれは。何も見えないっていうかこれは、視界を奪われたっていう方が正しいのかもしれない。

さっきまでのワザを受ける度に来るワザの衝撃とはまるで違う。これに、戸惑いと底無しの恐怖がやってくる。やってきたのだが、それが変に融和してしまいかえって落ち着いてしまっている。

「さあポケモンチェックだ」

くそつ、なーにがさあポケモンチェックだ、だ。

何も見えないのにコイントスボタンがどこにあるかなんてわからない。

確かデッキポケットの側にあるはずだ。これかな？

それらしきボタンを二回押した。が、肝心の結果が分からん。そりゃ見えないからだが……。

だがかるうじてレントラーGL LV・Xが苦しそうに鳴き声を上げたので予想はつく。穏便には済まなかったようだ。

「気絶、か？」

そうなれば次に出すつもりのバトルポケモン、ゴウカザル四の位置が、視界を封じられたためにさっぱり分からない。ここで手探りで適当にあつたポケモンを出し、それがゴウカザル四でないと、ここまでせっかく積み重ねたあと一歩、という状況がパーになる。

だからといってどうすればいいんだ。ダメだ、もう何も分からない……。

一之瀬「今回のキーカードはバクオング。

騒音はコイントスによって与えるダメージや効果が変わるぞ！

どの結果になっても上手く事を運ばせるプレイングも必要かな？」

バクオングLv.58 HP130 闘 (DP4)

無無 そうおん

コインを2回投げる。1回目がおモテなら、相手に50ダメージ。1回目がウラなら、相手のベンチポケモン全員に、それぞれ20ダメージ。2回目がおモテなら、相手をこんらんにする。2回目がウラなら、次の相手の番、相手プレイヤーは、手札から「トレーナーのカード」を出して使えない。

無無無無 ハイパーボイス 70

弱点 闘+30 抵抗力 - にげる 3

## 15話 最強の助っ人

「……どうなってんねん」

なんということでしょう。和田のダークライLV・Xの永遠の闇を受けた俺は視界を奪われ、プレイングすることが出来なくなっていた。

最初こそ現状をきちんと掴めなかったから焦らなかった俺だったが、徐々に何がなんだか分からない恐怖とどうすれば解放されるのかという思想の負のスパイラルに頭から突っ込んでいた。鳥肌総立ちの腕がふるふるで、手札を落としてしまいそうだった。

「さあ次のポケモンを選べ」

脅すように和田が冷たく言い放つ。正常な思考が出来ない俺を余計にパニックにさせようとしているのか、流石に今の俺でもそれくらいは分かる。

「——くん」

「ぬわっ！」

今度はバトルテーブルから声が聞こえた。この機械喋るのか！？「森くん聞こえる！？一之瀬です、僕が分かるなら返事をしてくれ！」

どうやら声は一之瀬さんの物らしいが、どうしてバトルテーブルから声がするのか全然見当も付かない。

「きつ、きつ、聞こえますっ！」

なんとか返事をしたが、恐怖で歯が震えていたせいで上手く発音出来ない。

『あらかじめ君に渡したバトルベルトには僕がモニターを通して通信出来るように仕組んでたんだ。言わなくてごめんね。そして君をこんなことに巻き込んでごめん。ただ、詳しい説明とかは今後は回しにしよう。まずはこの状況を切り抜けるんだ』

通信とは言え知ってる人が側にいるかのようで、僅かであるが安

心した。落ち着いて、さっきの言葉を反芻する。……待った。巻き込んでごめんって意味だ。

「巻き込んだ？」

巻き込んだってことはあらかじめこうなることが分かっていたっていいことだよな。

「巻き込んだってどういうことなんですか」

「さっきも言った通り、詳しくはきちんと後で話すよ。でも優勢順位は目の前の敵を倒すのが先決だ。ここでのこの話をしたら君の体力が先に力尽きてしまう」

「はいそうですか。って言えるわけないやろ！」

この態度が気に食わない。もう我慢の限界だ。俺は大会に「遊びに」来たのに変なのに巻き込まれて、それでじゃあ倒してください？ ふざけんな。自称シエルター並の強度を誇る堪忍袋も木っ端微塵に爆発した。和田とかもうどうでもいいくらいに不愉快だ。

「それもそうだよな。じゃあ細かいことは後にしてざっくばらんに言うと、戦って分かってると思うけど彼女はワザのダメージを対戦相手に衝撃という形で相手に与えることが出来る。そしてその能力は彼女が負けることで他の能力者同様失われる」  
ちから

他のつていうことはまだまだいるのか。傍迷惑だ。

「能力者との対戦には相手の衝撃に耐える体でもなく屈強な精神力が必要だ。たまたま君に白羽の矢が当たったけど、君からはそういうものを感じるんだ」

知ったもんか。何度も言うが迷惑だ。どうしてこんな目に遭わなきゃいけない。腹の底から怒りが込み上げる。胃酸はもう来なかった。教えてくれなかった一之瀬さんに腹が立つ。が、それ以前にやつぱり和田に腹が立つ。何がなんでもこの落とし前はつけさせてもらう。

「それで、どうするんですか」

この気持ちを語気を荒げて一之瀬さんに言い放てば、気持ちはずっとすっきりしたものの肝心の苛立ちはあっさりかわされた。

『うん。僕は君の状況を確認することが出来る。だから僕が君の目となり――』

「だったらベンチのゴウカザル四の場所分かります？ 次のバトルポケモンにしたいんですけど」

『はあ。ベンチの一番左だよ』

「どこだ？ これ……だな」

だいたいい手探りでベンチの一番左のカードを見つける。

カードが見えないだけであり、バトルテーブルの配置は覚えている。というわけでこのカードをバトル場に。

ところでバトル場にポケモンを出したときそのポケモンの鳴き声が流れるのだが、そのバトルテーブルから流れた音声は俺が出したはずのゴウカザル四のモノとは全然違っていた。

「な、あれっ、クロバットG!？」

確かに言われた通り一番左のカードを出したはずなのに、どういうことだ。

『さっきは最後まで言えなかったからもう一度言っよ。僕が君の目となり脳となる』

「なっ、これは俺の対戦で」

『悪いけど今の君は冷静さを失ってる。こんな様子では勝てたらラッキーレベルだ』

「そんなことないです！ 折角ここまで追い詰めたのにブチ壊されたらひとたまりも……」

いや、ふと我に返れば現に感情的になってる。悔しいが反論出来ない。感情的になって負けたことがあるという経験が、今は黙れと語りかける。

「……クロバットGなんて出してどうするんですか」

『安心していいよ。僕は世界一のプレイヤーでもあるんだから』

「は？ 世界一？」

これまた大きく出たもんだ。世界一って、大きく出たもんだ。そ

れでもなんとなく腑に落ちてしまうのは、一之瀬さんがこんなことをしていることと、何かしら事情を知っていることからタダ者ではないということが伺えたからだ。

『そう。僕は前々年度のポケモンカード世界大会優勝者。ちなみに去年は出てなくて……。と、そんな無駄口叩く暇よりだ』

確かに、細かいことは後にするべきである。明確な証拠はないが世界大会優勝者を自称するならそのお手並みを拝見するでしょう。

「俺のターン！」

『手札右から二枚目の炎エネルギーをベンチ左端のゴウカザル四に』  
「炎エネルギーをゴウカザル四につけ」

『手札の一番左にあるポケターンを発動してベンチ右端のクロバットGを手札に戻し再びベンチに出してダークライLV・Xにダメージを与えてターンエンドだ』

「ポケターンを発動。ベンチのクロバットGを手札に戻し、そして再びベンチに出してポケパワー、フラッシュバイツ。ダークライLV・Xにダメージカウンターを一つ乗せる！」

フラッシュバイツはクロバットGを手札からベンチに出したときに使えるポケパワーで、相手ポケモン一匹にダメカンを一つ乗せる便利なポケパワーだ。

今のでダークライLV・XのHPは20/100。そうか、ようやく俺にも一之瀬さんの狙いが分かった。ここからは俺一人でも出よう。

「これで俺の番は終わりだ」

「私の番だ。ダークライLV・Xで攻撃、永遠の闇！」

永遠の闇の威力はダークライLV・Xのポケボディーを重ねて70だ。60/80しかHPのないバトル場のクロバットGは気絶してしまうはずだ。

『次のポケモンは』

「ゴウカザル四をバトル場に出す」

ベンチには先ほど出したクロバットGとゴウカザル四の二匹のみ。

クロバットGの位置は覚えてるからそうでない方を出せばいい。

「サイドを一枚引いて私の番は終わりだ」

万事OK。この勝負、もらった。

「俺のターン」

『今引いたエナジーゲインをゴウカザル四につけて攻撃だ』

「ゴウカザル四にエナジーゲインをつけて攻撃。爆裂弾！」

エナジーゲインはSPポケモンにのみつけられるポケモンの道具で、SPポケモンのワザエネルギーを無色一個分減らしてくれる優れ物。これでエネルギー一個でも攻撃出来るようになる。

ゴウカザル四は両手に火の玉を作り、それをダークライLV.Xとベンチのバクオングに投げつけている。……はずだ。なにせ見えない。

かろうじて火の玉がぶつかったらしき音だけはした。

爆裂弾は相手ポケモン二匹にそれぞれ20ダメージずつ与えるワザ、これでダークライLV.X0/100は気絶。

それと同時に俺の視界も少しずつ戻っていく。急に強い光が入ってくるから、目を開けるのが億劫になる。

『もう見えるかい？』

「……はい」

ようやく光に慣れて、最後のサイドを一枚引けば、やっと勝ったという満足感を全身で噛み締める。自分の目で見て最後のサイドを一枚引いた。やっと終わった、俺の、勝ちだ！

そう雄叫びを上げたかったのだから、体に入らないな……

…。

まるでマラソンを完走しきった選手のように、体の力がふっと抜けてそのまま体勢を崩し、バトルテーブルに倒れ伏す。

せつかく見えるようになった視界も今度は瞼の重みで徐々に見えなくなり、最後に聞こえたのは……。誰の声だったかな……。

意識は濁流に飲み込まれてやがてなくなっていった。

次に目が覚めたとき、一番最初に見えたのは白い天井だった。

一瞬夢かと思ったが自分の部屋の天井とは違う事と、まだ体に痛みが残って力が入らない点からして、やっぱり和田との対戦は現実だったんだと一人で合点する。

「啓史！」

間髪入れずに悲鳴に近い甲高い声が聞こえる。

「うう……」

うるさいなあと言いたいが上手く言葉が出ない。手をゆっくり動かして耳を塞ぐ挙動を行う。それに気付いた由香里が小さくごめんとこぼす。

「急に一回戦終わったら倒れて、試合中でも吐いたりとかして不安やったんやから！」

「怒らんと言ってや……」

やっと出た蚊の鳴くような声で由香里をたしなめる。まだ視力も万全というには遠いのか、近くににいる由香里がうすぼんやりしていてどんな表情をとっているのかがはっきり分らない。ただ、少なくとも悲しい顔をしているのだろうか、由香里は目尻をぬぐっていた。

「ほんま心配させたんやから！」

「ごめんな……」

あははと笑って見せれば、由香里の深い溜め息が聞こえる。後でまたちゃんと謝らないとなー。

「ところでここどこ？」

「医務室みたいなとこ。試合後倒れたから、ここに担架で運ばれてん」

「そっか」

まだ体にこびりついてる疲労が瞼を閉じると囃し立てる。由香里には悪いけども少し休ませてもらうか……いや、大事なことを忘れて

た！

「せや！」

目をパチツと開かせ勢いよく上半身を起こす。体中に痛みが走って、いたたたとしこぼす。

「あほ！ 無茶するからそんなことに」

「それより聞きたいことがあんなんだけど」

「ん？」

「大会どうなったん？ PCC」

ああ、と一拍置いてから由香里は答える。

「あんたはもちろん棄権。あたしもあんた倒れたん見て駆けつけたから二回戦は棄権したわ」

「なんかごめん……」

「ごめんごめんって、別に啓史は何も悪くないやろ？ 謝る必要無いって」

「じゃ、ありがとな」

そうだけ言つてよつこらしよう、と上半身を再びベッドに寝かす。そのときまたもやあいたたと痛みが出てくるが、大したことはもうない。

「ちよつと寝かしてくれへん？」

もう瞼も開けてられない。重力に従ってそのまま落ちてきそうだしやまあ横に寝てるんだけど。由香里の返事を待つ前に、瞼は一気に下がってきた。それに逆らう術はなく、俺は再び眠りに就く……。

一之瀬「今回のキーカードはクロバットG。

ワザ自体は決して強いわけではないが、

逃げるエネルギー0、そしてなによりポケパワーが勝負の鍵となるかもね」

クロバットG HP80 超 (D P t 1)

ポケパワー フラッシュバイツ

自分の番に、このカードを手札からベンチに出したとき、1回使える。相手のポケモン1匹に、ダメージカウンターを1個のせる。

超無 どくどくのキバ

相手をどくにする。ポケモンチェックのとき、このどくでのせるダメージカウンターの数は2個になる。

弱点 雷×2 抵抗力 闘 - 20 にげる 0

## 16話 終わり良ければ全て良し

次に目が覚めたときは、寝過ぎたせいか逆に疲れてしまったような感じがあつた。

そして枕元にいたのは由香里ではなくて一之瀬さん。

「大丈夫かい？」

「はあ」

寝っぱなしなのも悪いと思ってゆつくり体を起こし、ベッドに腰掛ける体勢へと体を運ぶ。

「さつきはごめんね」

和田との対戦のことなのか、黙って巻き込んだことなのか、果たしてどっちだろう。

「説明も何もなしにあんなことに巻き添えにして本当にすまない」

「まあ貴重な経験でしたし」

皮肉っぽく言い返せば、一之瀬さんは手厳しいなあと笑いながら頭を掻く。こんな経験、もう二度と味わいたくない。思い返すだけでゾツとする、きつい経験だった。絶対夢にも出そう<sup>ちから</sup>だ。

「改めて説明すると、現在日本全国に彼女のような能力を使う能力者が多数現れているんだ。そして彼女の能力はワザの衝撃を相手の肉体の内部に与えるっていうもの」

バグオングの騒音なんかが良い例か。確かに、外傷を受けたとかとは違う痛みが襲って来ていた。

「まあ確かに内側に衝撃来ましたが、あの真っ暗なヤツは何なんですか？ 衝撃関係ないですよね」

「アレは僕自身もよくわからない。なぜ衝撃じゃないのか。可能性としては、あのダークライLV・Xのワザ、永遠の闇が具現化したとか」

まあ、確かに闇に包まれて視界が奪われたと考えたら具現化というのも頷けるけどもやーっぱり衝撃とかとは関係ないよなあ。

いや、今は分からないことは後にして、分かることを一つずつ判明させていこう。

「あの、一つ聞きたいことがあるんですが」

「なんだい？」

「一之瀬さん、あなたは何者なんです？ こんなことまで知ってるなんて。仕事でここに来てるとは言ってますが」

「僕かい？ うーん僕は、まあ分かりやすく言えばポケモンカードを作ってる会社の社員。って言えば分かるかな？」

その発言からクリーチャーズと思われる。なるほど、パンピーではなくそういう立場であるなら、能力とかいうのに関する知識があっても当然に思える。

「僕たちは全国にいる能力者を倒すために尽力してるんだ。こんな変な能力だかなんだかで僕たちのポケモンカードゲームが汚されちゃあ堪ないからね」

「なるほど」

「まあとにかく君のお陰で今回は本当に助かった。何度も言うけどありがとう」

と言うと一之瀬さんは腰かけていた椅子から立ち上がった。

「また何か機会があつたらよろしくね」

「ええー……」

よろしくしたくねえ。一之瀬さんは、はは、と軽く笑って部屋から出ていった。

一之瀬が啓史のいた部屋を出ると通路の壁に杉浦がもたれかかっていた。

「あれ、杉浦くんは森くんを看なくていいのかい？」

杉浦は黙ったまま首を右にやる。一之瀬はそれに釣られてその方向に目をやると、由香里がやってきた。彼女は二人を一瞥すると部

屋に入って行く。

「なるほどね」

「一之瀬さんの込み入った話の後は今度はこれだから、ゆっくりしたくても出来ないですし」

「そうかい。それじゃあ僕は帰るよ。君たちもあの部屋はそのままにして帰っていいから、あまり遅くならないようにね」

そう一之瀬が言い残して通路を去ろうとしたとき、杉浦が逃さず声をかける。

「あんたが公式の社員っていうことは分かったけど、他にもなんか隠してへんか？」

その言葉を一之瀬は振り返らずに受け流し、一度足が止まっていたものの再び通路を歩き始める。

「正直あんたをイマイチ信用出来ひん。もし啓史らにまた何かするんやったら絶対許さへんからな」

杉浦の言葉に耳を傾けることなく、一之瀬は足を止めることなく通路を進んで行った。

もう夕陽も沈みかけている頃合いの、大阪湾近くに位置するインテックス大阪。激戦があったとは思われない、嵐の過ぎ去った後のような静けさを伴った会場を出た一之瀬は携帯電話を取り出す。

「もしもし、一之瀬です。和田奏の敗北と能力が使えなくなったことを確認しました。明日には東京に戻ります」

一之瀬は彼の上司の松野藍にそれだけ連絡をいれると、携帯をポケットに戻そうとする。

しかしそこで携帯がけたたましく鳴り出した。訝しげに画面を見れば、見たことのない電話番号だ。不審に思ったが、直感的に電話を受けてみる。

「もしもし？」

『久しぶりだな』

それは一之瀬が知っている男の声だった。そして彼にとって重要な人物だ。

「ああ、貴方だったんですね。貴方が携帯なんかを持ってるなんて微塵も思ってませんでした。それで、用件は？ 能力絡み？」

『流石の洞察だな。こちらは夏までに準備が整う』

「夏、ですか。遠いですね」

『そう文句は言わないで欲しいね。こっちだって現状維持しながら準備を進めるのが大変なんだ。だから君の手も借りているのに』

「しかし能力はもう少しなんとかならないんですかね。見てるこちらが辛いです」

『私が能力を与えている訳じゃないし、むしろ私は能力を回収してくるくらいだ。そんな文句を言うのは遠慮してくれ。それに能力と言っても時間を止めたり空間をねじ曲げたりしないだけマシだよ』

「まあそれはそうですね……」

『突如発生した負の感情に反応する次元エネルギー。そしてそのエネルギーがポケモンカードを媒体に、人間にもたらす能力。敗北によって負の感情が弱まり、それに比例するように弱まったエネルギーを私が回収すれば、いまだ放出され続けるエネルギー量を上回れないとはいえ総エネルギー増加量は抑えられるというわけだ。所詮は応急措置だけど、今はこれで凌ぐしかない』

「それは、分かってます。……そういえば和田奏を倒した森啓史のデータベースを後で用意しておきます」

『そうか、検討しておくよ』

「貴方のお気に入りの方は？」

『奥村翔のことかい。彼には他にも個人的な諸用があるからね』  
「そうですか」

『夏とはいえ半年はない、あと五ヶ月くらいだ。この次元の歪みを完全に直す。そのために一之瀬、君のその力が必要だ』

「まあどうせ裏方仕事でしょうに」

『いつもすまないね』

「それでは、また」

通話を切った一之瀬はやれやれ、と頭を掻くと、忙しくなるなど  
呟くのであった。

「本当に大丈夫なん？」

「いつまでもここで寝てる訳にはいかへんやろ」

いつもの威勢の良さが微塵もなく、まるで小鹿のような弱い少女になった由香里を見ているのは……。うーん、希少だ。ビデオカメラがあれば欲しいなあなんてどうでもいいことを考えた。

「そんなこと言うても……」

「しょっちゅう人をめちゃくちゃ使ってるのによー言えんな。もしかして心配してくれてんの？」

「うん」

否定されるつもりで軽い弾みで溢れた言葉がまさかあっさり肯定されるとは。嘘やーん。と、言いたかったが、口を「う」の形にしなければ言葉にできなかった。いくら俺が軽はずみジョークをよくするとはいえ、流石に由香里の萎れた表情を察せない訳ではない。潤目な彼女を見るのは本当に何年振りだろうか。本当に心配してくれてるんだな。

「よっこいしういち」

場を和ませるつもりでくだらない掛け声と共に、体をなんとか持ち上げベッドから立った俺だが、視界がぶれて頭が痛い。急な立ちくらみのせいか足元が覚束なく、いつか環状線で見かけた酒臭いおっさんのように平衡感覚を保てずよろけてしまう。

これは後ろに転ぶ。そう感じたと同時に、由香里に右手を握られそのまま引っ張られる。

そこでようやくと頭が覚醒すると、由香里の顔がすぐ目の前にあ

った。目を潤ませ、口を尖らした由香里は視線をふいと俺から逸らす。

「急にあんなことなったりして、ほんまに心配したんやから」

「本当に心配してくれてんねんな……」

「ばか、好きやないやつのことにも心配するほど人間出来てへんわっ

……！」

「あ痛っ！」

右足をぐつと踏まれる。こっちを向こうとしないから、照れ隠しのつもりなんだろうか。いい迷惑だ。

さて、果たして友人として好きなのか、もしかすると異性として好きなのか。確かめる術は俺にはないから、

「俺も由香里が好きや」

と返すのがせいぜい俺の限界であった。

耳を赤くした由香里は繋いでいた右手を離し、そんなん言えるんやったらもう行くで、と語気を荒めて部屋から去っていった。

追いかけるように慌てて部屋を出ると、やけにニヤニヤしたタカの顔が最初に目につき、俺も由香里も揃って顔からマントル、猿のお尻もびっくりなほど赤くなってしまった。

インテックス大阪を発ち、すっかり夜になってしまった大阪を三人でくだらないことで笑いあいながら帰路に着くことにした。

あんなことがあったからなのか、それともそれとは関係ないのかは知らないが、三人で気ままに過ごすこの時間がとても愛しく、そして幸せだった。

それから二ヶ月後の四月も下旬、由香里は单身新大阪駅で新幹線に乗車した。

目的は家の用事だが、そのついでに中学時代の旧友、奥村翔との再会をする。それが楽しみだった。

そんな期待を胸に乘せて新幹線は東京へ向かっていく。  
さらにその三ヶ月後、つまりPCC大阪から五ヶ月経った七月。  
杉浦はポケモンバトルのイベントのために、金銭的な問題から新幹線を使わず電車をたくさん乗り継いで東京へ向かった。  
彼も関東にいるたくさんさんの友人と会うことを楽しみにしているが、そこに思いもよらぬ偶然が重なってしまうのだった。

一之瀬「今回のキーカードはアルセウス。」

どうしてこのカードかはそのうち分かるさ。

HFを今まで読んでくれてありがとう」

アルセウスLv・100 HP80 無（DPt4）

このカードは、デッキに何枚でも入れられる。

―― はもののうねり

自分の場に「アルセウス」が6匹いて、それらがそれぞれちがうタイプなら、自分の山札の基本エネルギーを6枚まで選び、自分のポケモンそれぞれに1枚ずつつける。その後、山札を切る。

無無無 てんのやり

相手のポケモン1匹に、80ダメージ。自分のエネルギーをすべてはがしてロストゾーンにおく。

弱点 闘×2 抵抗力 - にげる 1

16話 終わり良ければ全て良し（後書き）

これでHF完結となります。

## Hyper freshを終わって

いやあ、お疲れ様です。読んでくださってありがとうございます。ポケモンカードゲームシリーズの番外編、スピノフというポジショニングのこの小説。

基本的に携帯での暇つぶしとして携帯で書き始めたモノなんですが、思った以上に熱がこもってしまいました。

試合中の資料を携帯の下書き機能を使っていたんですがパソコンのメモ帖やルーズリーフと比べると勝手が悪すぎるので大変苦労しました。もう携帯でカードの対戦は書きません。書きたくないです。あまりにも辛すぎる。

さて、残された伏線はもちろん本編で回収させていただきます。

由香里、杉浦はもちろん啓史も本編に登場する予定ですので、そちらもご期待ください！

彼らの物語はまだまだ終わりません！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9106/>

---

Hyper fresh

2011年11月16日13時14分発行